東海道名所圖會 五

和書門 類
八八七六 號
一八七 函
一二 架
六 冊

内閣文庫
和書 類
八八七六 號
六 冊
一七二 函
二一 架

内閣文庫		
番號	和	8876
冊數	6 (5)	
函號	172	270

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

東海道名所圖會巻之五

目録

○吉原
焉氏筆乗
南郭文集
為村卿紀行
冨士の圖
冨士山
竹取物語
朝鮮人詩稿
琉球人詩稿
頼朝卿牧狩の圖
[illegible]書
勅撰古詠
伊勢物語
更級日記
俳諧古句
曾我夜討画
都良香冨士記
義楚六帖
羅山丙辰紀行
十六夜日記
神社考
万葉古詠
史記
徂徠文集
曙の記
冨士賦
冨士鳴澤
田子浦
冨士の沼
左不二
元吉原 鐙石
手児呼阪
要石
芝瀬川
○原
○白隠禪師蹟
松蔭寺
白隠行状畧記
白隠語録
師齒迫山
興國寺古城
阿野禪師古跡
阿野細江
井出館舊趾
竹下道
横走関
愛鷹山
足柄関
足柄神祠
新羅三郎秘曲傳授
富士人穴
八重山
丸子神祠
千本松原
宗長墓
○沼津
車返
冨士隠
亀鶴墳

黄瀬川
千貫樋
別宮八社
神池
流鏑馬場
例祭圖
興小島
風越臺
本社
藥師堂
箱根温泉
曽我兄弟墳
虎墳
庚申墳
底倉湯
湯本湯
早雲寺
豊太閤陣所

宗祇終焉地
駿豆両國堺
舞臺
随身門
鳥部屋
神馬厩
走湯山
冨士見平
○箱根
末社
親鸞聖人堂
生死池
元西河原
大師堂
蘆之湯
宮下湯
温泉記
北条氏墳
佛殿
宗祇墳
石橋山

頼朝義経初對面陣所
○三嶋
鳥居
藥師堂
熱海温泉
山中古城
箱根湖水
行者堂
曽我兄弟
禿倉
頼朝状
書石
多田満仲塔
小地獄
堂嶌湯
湯本名品挽物店圖
早溪
○小田原

三嶌神社
本社
末社
三層塔
神供所
二天門
寶蔵
古々井杜
豆相両國堺
箱根権現社
名産
獅子巌
御供所
名所四十九箇所
賽之河原
十二光佛石像
氣賀湯
塔澤湯
勝驪山
玉緒橋
淨泰寺
外郎店
小田原北條

酒匂川
藤巻寺
日蔭馬場
鴫立庵
鴫立碑
三社権現
馬入川
奥不動
鎮守
二王門
奥の院石尊社

小餘綾礒
鹿松
小餘綾杜
西行上人像
詠草
什物
虎御前像
花水橋
十間阪
白山祠
二重瀧
經蔵
末社

曽我里
吾妻山
切通地蔵
○大礒
○平塚
大山寺
神楽舎
良弁瀧
鐘樓
新瀧

川匂神社
相模國府
鴫立澤
虎子石
八幡宮
前不動
行者堂
山門
大飛泉

吉原驛より
ふじの山を眺れバ
西の方にみえたる
うみ長く裾のより
生出る事ふたつなく
異國にもならび
なき名山にして
まことに尊くぞ
おぼゆる

冨士山
扶桑第一山
重此對孱顔
白雪初陽映
崚嶒霄漢間
蕉中常
天津日のてらせるよもの
國中にたぐひなしと
いふふじの祢
洛 伴蒿蹊
吉原

源順が竹取物語ハ寶樓閣経に比して書れしと云ふ事なり又室ひろく竹取の翁が娘ハ容顔美麗乃類ひなれバ後宮に入内して寵を蒙しと云容月出岩屋といふが其うつくしさもまれなれどもあはひまでも不死の薬を捧げて上天のひまれぞ此のみぞ又縁といへり王元之が竹樓記に琴を鼓するに宜し琴調和暢し又咸平二年八月十五日に記をかかれしも月夜を賞しけるが故に赫奕姫と竹樓記に書遺されしもさるひさる懐かしきや

竹取翁
赫奕姫

駿河 吉原

原まで三里六町此驛はむかしは東南のかたにありしが延宝八年八月六日暴風烈しく潮水備より津濤して家居漂流し人馬溺死ともの多し天和二年の春此地に移れ

冨士山

四海無雙の名山にして駿河甲斐相摸三國に蟠るといへども駿州冨士の郡にあれば冨士山と号し駿河の冨士ともいふ

本朝文粋

冨士山記　都良香

冨士山者。在駿河國。峯如削成。直聳属天。其高不可測。歴覧史籍所記。未有高於此山者也。其聳峯欝起。見在天際。臨瞰海中。觀其靈基所盤連亘數千里間。行旅之人。経歴數日。過其下去之顧望。猶在山下。盖神仙之所遊萃也。承和年中。従山峯落来珠玉。玉有小孔。盖是仙簾之貫珠也。又貞觀十七年十一月十五日。吏民仍舊致祭。日加午天甚美晴。仰觀山峯。有白衣美女二人。雙舞山巓上。去巓一尺餘。土人共見。古老傳云。山名冨士。取郡名也。山有神。名淺間大神。此山高極雲表。不知幾丈。頂上有平地。廣一許里。其頂中央窪下。體如炊甑。甑底有神池。池中有大石。石體驚奇。宛如蹲虎。亦其甑中常有氣。蒸出其色純青。窺其甑底。如湯沸騰。其在遠望者。常見煙火。亦其頂上匝池生竹。青紺柔愞。宿雪春夏不消。山腰以下生小松。腹以上無復生木。白沙成山。其攀登者止腹下。不得達上。以白沙流下也。相傳昔有役居士。得登其頂。後攀登者。皆黙額於腹下。有大泉。出自腹下。遂成大河。其流寒暑水旱。無有盈縮。山東脚下有小山。土俗謂之新山。本平地也。延暦廿一年三月。雲霧晦冥。十日而後成山。盖神造也。

望不盡山歌并短歌　山部宿祢赤人

万葉

○天地之分時従神左備手高貴寸駿河有布士能高嶺乎天原振放見者度日之陰毛隠比照月乃光毛不見白雲母伊去波代加利時自久曽雪者落家留語告言繼将徃不盡能高嶺者

返歌

同

○田兒之浦従打出而見者真白衣不盡能高嶺尓雪波零家留

新古今　白妙之

詠不盡山歌并短歌　高橋蟲麻呂

同

○奈麻余美乃甲斐乃國打縁流駿河能國與己知其智乃國之三中従出之有不盡能高嶺者天雲毛伊去波伐加利飛鳥母翔毛不上燎火乎雪以滅落雪乎火用消通都言不得名不知靈母座神香聞石花海跡名付而有毛彼山之堤有海曽不盡河跡人之

渡毛其山之水乃當烏日本之山跡國乃鎮十方座
神可聞寶十方成者山可聞駿河有不盡能高峯者
雖見不飽香聞

同 返歌

同 不盡嶺尓零置雪者六月十五日消者其夜布里家利

同 布士能嶺乎高見恐見天雲毛伊去羽〻田菜引物緒

同 吾妹子尓相縁乎無駿河有不盡乃高嶺之燒管香將有

同 阿敝良久波多麻能乎思家也古布良久波布自乃多可
禰尓布流由伎奈須毛

同 妹之名毛吾名毛立者惜社布仕能高嶺燎乍渡

同 安麻乃波良不自能之婆夜麻巳能久禮能等伎由
都利奈波阿波受可母安良牟不盡能禰乃伊夜等
保奈我伎夜麻治乎毛伊母我理登倍婆氣尓餘婆

受吉奴

同 可須美為流布時能夜麻備尓和我伎奈波伊
豆知武吉氏加伊毛我奈氣可牟

拾遺 千早振神も思ひのあれハこそ年へて婦しの山も燃らめ　人丸

詞花 月くもりに山路のこのは時雨しハ婦しの高根の雪そみえける　大江嘉言

古今 君といへハ見まれ見すまれ婦しの根のめつらしけなくもゆる我戀　藤原忠行

同 婦しの嶺のならぬ思ひにもえハもえ神たにけたぬむなし煙を　紀のめのと

同 人しれぬ思ひをつねにするかなる婦しの山こそ我身なりけれ　讀人しらす

後撰 志なのなる浅間の山ももゆなれハ婦しの煙のかひやなからん　するか

續後撰 婦しの嶺を咲けるものゝひとつにて[illegible]山櫻かな　[illegible]

玉葉 わかなけていくかに成ぬ東路や三國とさかふ婦しの志つくも　前大僧正[illegible]

風雅 田子の浦ふくしほも雲ね五月雨に絶まもみえぬ婦しの煙か　[illegible]

同 婦しの嶺を晴る空にかへれハくすもまよへる白雨の雲　惟宗光吉朝臣

寛政丙辰秋九月過駿河
吉原驛望芙蓉景　原在正寫

題池生冨士山圖
寒色飛来暁紛紛
稍霽始看峰影分
秋光能開天半色
始知千里一勞君
大典禅師

和古今
風子おひく
婦しのすそは
空ふきえ高
ゆく糸も
ちらぬ
森といふ那
西川
石田友汀画

たのしみや
冨士のすそをはなれ
八巾の糸
湘夕

義楚六帖曰（後周齊州開元寺講倶舍論賜紫明敎大師進釋氏六帖義楚集）

日本國亦名倭國東海中秦時徐福將五百童男五百童女止此國也今人物一如長安客東北千餘里有山名富士亦名蓬萊其山峻三面是海一朶上聳頂有火煙日中上有諸寶流下夜即却上常聞音樂徐福止此謂蓬萊至今子孫皆曰秦氏彼國古今無侵奪者龍神報護法不殺人為過者配在犯人島其他靈境名山不及一一記之

史記巻之一百一十八淮南王安傳

昔秦絶先王之道云云又使徐福入海求神異物還為偽辭曰臣見海中大神言曰汝西皇之使邪臣荅曰然汝何求曰願請延年益壽藥神曰汝秦王之禮薄得觀而不得取即從臣東南至蓬萊山見芝成宮闕有使者銅色龍形光上照天於是臣再拜問曰宜何資以獻海神曰以令名男子若振女與百工之事即得之矣秦皇帝大説遣振男女三千人資之五穀種種百工而行徐福得平原廣澤止王不來

焦氏筆乘曰

日本國名倭國東北數千里有山名冨士又名蓬萊國中最高山三面皆海一朶直上頂有火烟秦時徐福入海求藥終止此至今子孫稱秦氏

竹取物語登天段

かく屋姫いはくこゝにも心にもあらでかくまかるにのぼらんをだに見送り給へといへとも何しにかなしきに見送り奉らん我をいかにせよとてすてゝはのぼり給ふぞ具してゐておはせねとなきてふせれは御心まどひぬ文を書きてをきてまからん恋しからんをり〳〵取出て見給へとてうちなきて書くことばゝ　此国に生れぬるとならはなげかせ奉らぬほどまて侍らで過わかれぬる事かへす〴〵ほいなくこそおぼえ侍れぬぎおく衣をかたみと見給へ月の出たらん夜は見おこせ給へ見すて奉りてまかるそらよりもおちぬべき心ちすると書おく天人の中にもたせる箱あり天の羽衣入れり又あるは不死の薬入れり　一人の天人いはく壺なる御薬奉れきたなき所の物きこしめしたれは御心ちあしからん物ぞとてもてよりたれはいさゝかなめ給ひて少しかたみとてぬぎおく衣につゝまんとすれはある天人つゝませず御衣をとり出てきせんとす

その時にかく屋姫しばしまてといひて衣きせつる人は心ことになるなりと
いふもの一言いひおくべき事ありけりといひて文かく天人おそし
と心もとながり給ふかくや姫物しらぬ事なのたまひそとて
いみじくしづかにおほやけに御文たてまつり給ふあはてぬさま也（文詞）
かくあまたの人を給ひてとゞめさせ給へどゆるさぬむかへまうできて
とりゐてまかりぬればくちをしくかなしき事宮づかへつかう
まつらずなりぬるもかくわづらはしき身にて侍ればこゝろえずおぼし
めされつらめども心づよくうけ給はらずなりにし事なめげなる
ものにおぼしめしとゞめられぬるなん心にとまり侍りぬるとて
今はとて天の羽衣きるおりぞ君をあはれとおもひいでける
とて壺のくすりそへて頭中将よびよせて奉らす中将に
天人とりてつたふ中将とりつれば、ふと天の羽衣うちきせ奉り
つれば翁をいとほしくかなしとおぼしつる事もうせぬ此衣きつる

人は物思ひなくなりにければ車にのせて百人ばかり天人具して上りぬ
其のちおきなおうなちの涙をながしてまどへどかひなしあの書お
きし文をよみてきかせけれど何せんにか命もおしからんたがためにか
何事もようもなしとて薬もくはずやがておきもあがらでやみ
ふせりけり中将人々ひきぐしてかへりまいりてかくや姫をえたゝかひ
とめずなりぬる事こまやかに奏す薬の壺に御文そへてまいらす
ひろげて御覧じて（帝）いといたくあはれがらせ給ひて物も
きこしめさず御あそびなどもなかりけり大臣上達部を召して
いづれの山か天にちかきとゝはせ給ふにある人奏す駿河の国
にあるなる山なんこの都もちかく天もちかく侍るとそうすこれをきかせ
給ひて
（御門）あふこともなみだにうかぶ我身にはしなぬくすりもなにゝかはせん
かのたてまつる不死のくすりにつぼぐして御使にたまはす勅使には

月の岩笠といふ人を勅使としてするがの国にあなる山の頂にもてつ
くべきよし仰給ふ峰にてすべきやうをしへさせ給ふ御文
不死のくすり壺のならべて火をつけてもやすべきよし仰給ふ
所のよしうけたまはりて兵者もあまたぐして山へのぼりけるより
なん其山をふじの山とは名付ける其のけぶりいまだ雲の中へ
たちのぼるとぞいひつたへたる

此物語は源順の作なり詞幽玄にして久代より世に賞する事久し按るに
富士を兵士に富とりよりて書なせり又不死の薬を焼しよりふじの名あること
を詠しかん或は不二不盡とも書て秘藏抄に富士の七名を擧て云
藤嶽　鳴澤　高根　常盤山　塵山　二上山　三重山　新山　見出山
三上山　神路山

伊勢物語
冨士の山を見れば五月のつごもりに雪いとしろうふれり
時しらぬ山は富士のねいつとてかかのこまだらに雪のふるらん
新古今　業平朝臣
其山はこゝにたとへば比叡の山をはたちばかりかさねあげたらんほどし
てなりはしほじりのやうになん有ける

塩尻は伊勢物語七箇の秘訣の其一つ所謂七箇しくと云しき物の事。月やあらぬの
事あくた川。白玉。都鳥。あまのさかその事。終に行人の事等なり

丙辰紀行
一山高出衆峯巓　炎裡雪氷雲上烟
大古若同仁者樂　蓬萊何必覓神仙　羅山

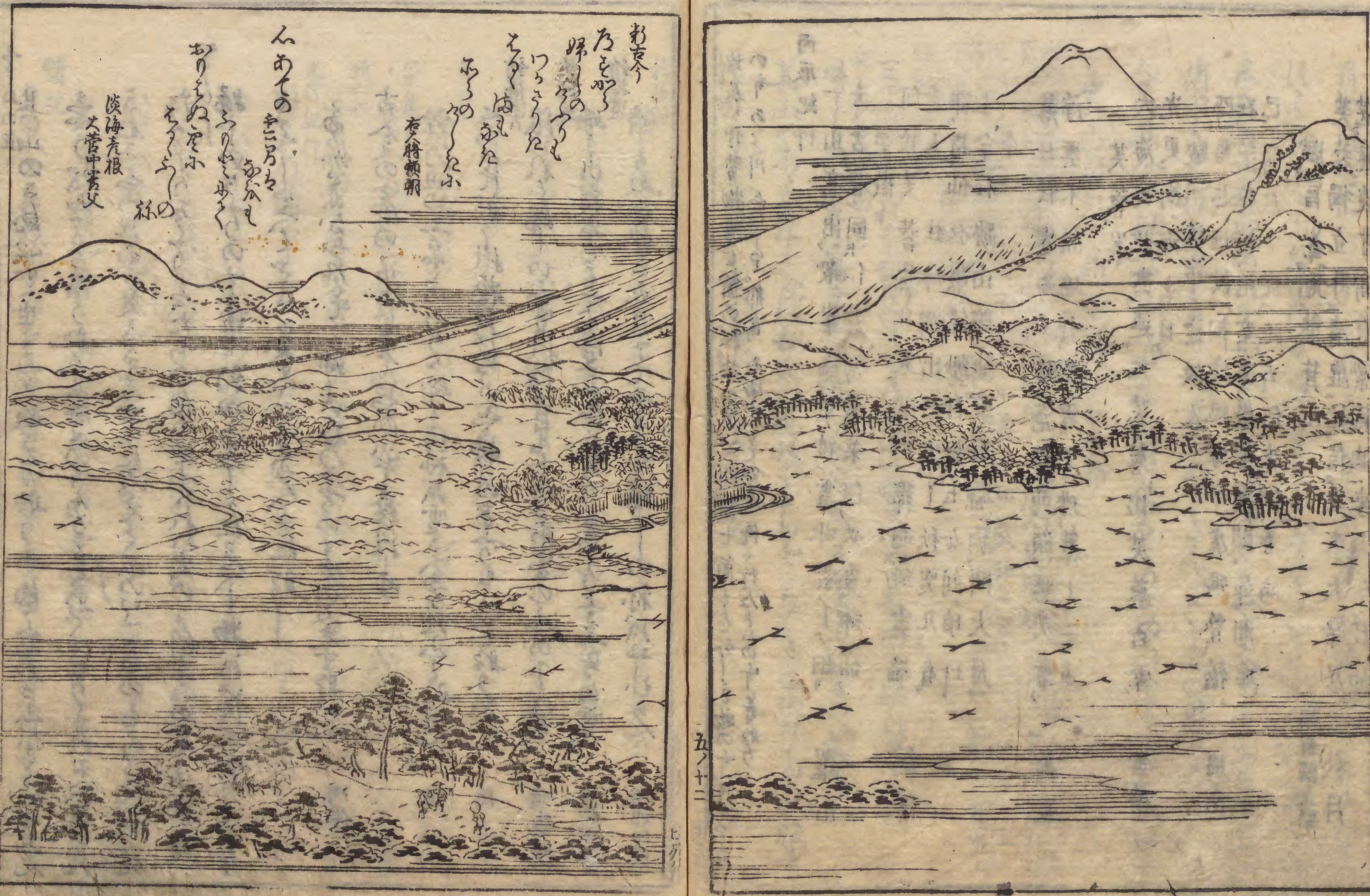
望嶽
何物芙蓉落日寒　闌中霧迥緑雲端
青天一柱崢嶸出　白雲千秋突兀看
誰指仙衣懸縹緲　自疑玉女剖琅玕
于今全石跡山陰地　與取驪駒問大舟　徂徠

落日秋寒海上峰　危樓西顧眺芙蓉
浮雲不隔瑤臺色　雪下珠簾十二重　萬菴

芙蓉峯
大海天此盡　連天芙蓉出　芙蓉白雪
光　更衝海上日　金華

駿州道中逢故人
四馬悲征役　相逢風雪中　虞卿登橋
在　范叔綈袍空　蓮嶽雲猶闊　萍洲途
己窮　君今從此去　何處問春鴻　周南

賦冨峯贈熊其山
芙蓉獨立卧清虚　始信大東天帝居
堪競俊才高復潔　氣調来迫奈君如
朝鮮國文學　秋月


新古今
前大将頼朝
淡海彦根
大菅中養父

さらしなの記
其山のさまいと世にみえぬさまなりさまことなる山のさまの
こんじやうをぬりたるやうなるに雪のきゆる世もなくつもりたれば色こき
きぬに志ろきあこめきたらんやうにみえて山のいたゞきのすこしたひらぎ
たるよりけぶりはたちのぼる夕ぐれは火のもえたつもみゆと云云
いさよひの記
婦じのけぶりのすゑも朝夕たしかに見えし物をいつの年よりか
たえしととへばさだかにこたふる人だになし
たがかたになびきはてゝか婦じのねの煙のすゑのみえずなるらん　阿佛
古今の序のことばまでおもひ出られて
いつの世のふもとのちりか婦じのねの雪さへつもる山となりけん　同
新續古
くちはてしながらの橋はながらへて婦じのけぶりもたえぬなりけり　同
新勅撰
浪にいれて婦じのみ雪はきゆる日もなくあまぎる空の山の下紫　順徳院
婦じのねをこゝにても空にまがひけり雲より上にみゆる白雪　守覚法親王
新拾遺
時しらぬ山郭公五月まで雪にも婦じのねはなかむらん　祝部行氏

新後拾
婦じのねをながめ見れば白雪のたえまにけぶりたなびく北の京　菅原長秀
家集
人志れず思ひするがの婦じのねのむねにくゆりやもえわたるらん　伊勢
月清集
ふじの山きえぬればやがてふる雪の一日も夏になる空ぞなき　後京極摂政
家集
焼人もなしに思ひぞ婦じの山雪のうちより煙と立て　源重之
万代集
舟とむる田子のうらはの夕しほにふじのみねよりかすみはれ行　紫金臺寺入道二品親王
家集
草ふかみまよひにまさる思ひかとみだれたる婦じの煙なるらん　大中臣能宣
新六帖
するがなる田子の浦はにうつす高ねの雪の色ぞかしこし　前納言為家
光行紀行
田子の浦にうちいでゝ冨士の高根をみれば雪かとも
かくていまだ白妙にはあらずあをみて天にまじはりすがたの山よりも
たかく見ゆ貞観十七年の冬の比白衣の美女ふたり二人山の巓
にならびて舞しと都良香が冨士の記に書るいかなりける事かと覚束なし
冨士の根の風にたゞよふ白雲は天つ乙女の袖かとぞ見る　光行
暑記
このふもとの名残なく空はれて冨士の梢まで雲もかゝらず春の雪のきえ

聞えさせし曙とまりく露かゝりける人おほく物をかしく御旅宿より
ゆかし所せけれかれくまきに尽ふるやまとうた選ひし御定有けるは
冨士の御當座あそはしける 御詠 二條左相府
ゆきかけのかゝるとはかり見えつゝひかきふもとのむら峰の白雪
おろくあまさたひすしの吉田中よ詠に幽玄抜群の尊詠なれど光君
あけほのゝ春に見えてむる峰のまはのれ人へ消てかさらん
御らるゝ山口よつくくみけかうらん 光廣公

毎見士峯聳天霄仰弥高
荘周曽日泰山比一ケ比倫秋毫

八重かすみたちもかくさて峰の山の名にもさくは 卜

東紀行
ふもとより百ゆ根をかけて晴る日にもさへてむすふ峰の跡 冷泉為村

帝擲崑崙雪罽之扶桑東
突兀五千仞芙蓉秀碧空 秋玉山

うへ見く
人とやいうなりしんるの葉も井ともぬ冨士の曙 琉球人讀谷山王子
浮鴻原にて
峰の跡の雪吹おろす風見へ一むらくもる浮嶋ヶ原 同

詠富士山
嶽色遙浮遠客航擬從高處振衣裳
環形屹立雄天地積氣常寒擁雪霜
瑞靄清籠池上竹灝光低襲海中来
詩篇恰有愚公力移得屏顏入彩囊
右朝鮮人李礩東郭詩次日本隨月
韻贈爲ゑ云

元日の見る物にせんふしの雪 宗鑑
冨士の山ゆきともしらすことしの雪 湖春
冨士にせよく三月七月八月かな 信徳
目にかゝる時やことさら五月不二 くせ成
不二乃繪賛
三帆舟を懐風に形るかけみれ 其角
冨士の姿ひ日和し高し旗乃色 加賀千代
百富士や井も元日の所よう 舊國
あけきりや空にしられぬふしの音 佳棠
四萬八千丈冨士ましの名みに 雛窓

武衛頼朝卿ハ烈国の諸侯が
従へし三国にならびなき富士山のまき
牧狩しめしたまふ事
實に征夷将軍の
いきほひあるべし
法橋山作

祖先の
源頼光公ハ
大江山の鬼神を
退治ありて
君臣ともに
紀状の姿にて
登りしのみなる
同日の論にあらず
君子ハ危ふきニ
近つかずとして
もり川き付る

其二
不二の牧狩

法橋

其二
曾我兄弟夜討

夫冨士ハ芙蓉と號る事ハ八の峯八の谷ありて其體ハ葉の蓮華
に似たり不二ハ都氏の宣ふ郡の名なりとかや山を遶して峩然
生ずる謂也嶽ハ駿甲相の三国に跨りて巓ハ十五州の壮観にて
青天忽見素羅笠羅笠擔中十五州と惺窩先生も詠じ給ひ又石
川丈山も雪如紈素煙如柄白扇倒懸東海天とも賦し京師乃四明大
和の金峯よりも見ゆる尚も肥の崎陽より百里ばかり漕出て大洋より
冨士峯見ゆべく外夷乃舩我邦へ渡海の的とせりとぞ聞ゆ抑も
孝安帝九十二年此山初て現ずとも又孝霊帝五年近州琵琶
湖と倶に一夜に現ずともいひ傳り或説に大宝元年此山雲霧深
くしていまだ現ぜざれバ人民もおそれて是を祭る事なし孝霊の御
時初て是を祭りて見顕しをりしぞとされバ都氏の記にみえざ
れバ正説にハあらず本朝の高嶺にして絶頂まで九里餘直立乃
高さを積れバ都て一千五百丈余にて小斗に近し峯の貌妙にして業平も

塩尻に似たりとぞ曲ひ其天に雲ハ戴りて萬葉に詠れ巓ハ平原にして
其中を鳴沢とて凹にして甑の如し底に池あり今ハ氷涸て形し虎
石とて虎の蹲たに似たる石ありそれハ夜陰に旭ハ耀し且又ハ三尊佛
ハ拝すとぞ邈に東北ハ見下せバ海面幽にして島嶼浪に臥ハ鷗の如
西南ハ只雲霧朦朧として水も空も見えわかバ山路ハ三の街ありて
あるよりとりて筋にかる裾野ハ長うして百里に係る形ハ尾の冨士見
原遠の汐見坂まで山の形相同じと德ハ清見神原よりハ良に當て峙
たり原よりハ正面にして裾野まで鮮にして山趾東西に長し三嶋
箱根よりハ伏籠乃貌にみゆべく鎌倉よりハ北の方へ甚延たる武蔵野
よりハ西南にあたりて江府の赤坂駿河臺よりハ便輿乃窓に睇と動し
日本両国の橋上よりハ馬上の人乃首をめぐらし駿河町乃名も冨士に寄たり
延喜式内浅間神社ハ此山乃神にして木花開耶姫と称し大山祇
乃御女にして瓊々杵の皇妃なりとハ櫻樹に夭して冨士に櫻

代詠ども有ましさは緑ハ三嶋ハ大山祇の命なれども土俗御視子とも云ふ
なりし水無月の禅定とて松明を照して幾千万といふ数しれ
真砂ハ諸人の裾に続くなれば其夜又岸ハ光る其音流れのごとし
とて岸に鳴沢の名ありとも里人いふ富士の御神の所におし
みかくすとて竹取物語して竹とりの翁といふ者有て竹を伐に
なる時其竹の中に三寸ばかりの人ありけるを見しそれを養ひ育たるに
幾の間に生長し艶顔なる事限なし屋の内も光満ぬるなり
名をかくや姫といふ風土記にもこれを鶯姫と称す今昔物語にも
見え詞林採葉にも　天智天皇此姫を養せ給ひ倶に此山嶺の窟
に隠れぬと有ぬめて記し又桓武天皇かくや姫を恋ひ勅使とを六
されたしは不死の薬を献りて天上したるも此ものを薬を焼しより富士の
名なりとかの言の事にある起りと書り　天智帝とは京師御廟野
より昇天しのまゝく御沓の止る所に陵を築て陵村の名今にありと日本紀

小川のおふ大津宮を山科にうつして置る武人の云實ハ天皇巡視し給ふ時薩摩潟
鹿児嶋のかくりも崩じ給ふ今も御陵の跡にあるとし其国の人の語り
つたへ告るまれ秘蔵の事とあらん　桓武帝陵ハ京師深草柏原より一千年
に逮ぶといへども其所顕然たり故に柏原天皇とも申せり源順の竹取
物語と書れしを荘子にも数く寓言ある難波の契沖阿闍梨ハ寶樓閣経
およりて著されしや宜べし古雅の名文にして歌道の標とある書なり
白水小巻は取後成卿をあらさに紀名は残し西行法師ハ五文字は貴
かも頼朝卿を牧狩に武将の威を耀し曽我兄弟ハ倶に天を戴ざる
とて本意を達し常陸房ハ仙境に入仁田忠常も人穴に名高く役
小角ハ木履にて岸を上る太子ハ驃駒に馳て空海圓珎も登山して
石佛を携へ徐福ハ秦帝を欺ひくまつに来り絶頂の鮮米腹の崔
富士松の紅葉不二甘草など芙蓉婦と海苔富士の八湖を倒に
と浸し甲州の府より三州の嶺まで見へぬ法眼の霞の姉ども又よまなりし

むかし此東海道ハ富士愛鷹の山乃ふもとを通り其中に横走関と
いふあり愛鷹ハ足柄横走これハ富士乃三関とてむかしの道ハ旅人まれ
く通り重服綱織もあれど愛鷹明神なく厭せのひ南海の中に出たる
にうかる鳴沢打よせさ好みて今の海道となれる其かみ忘れし
鳴は浮鳴原といひ傳へ給ふ抑三國無雙の名山と貴ぶ義拵六
帖及び宗學士が日東曲りも褒く蓬莱山と稱る所紀の熊野尾の
熱田は山なる矣しそれが中にも最上にして眞に 我邦の仙境梅福
九華眞妃もおとろを憾多きまかるべし

神社考

孝安天皇九十二年六月冨士山涌出初ハ雲霞飛来如穀聚無嶮岨後頂上五盤石出其落下趾作溪谿取郡名而日冨士山形似合蓮華絶頂八葉層々到第八層中央有大窪窟底湛池水色如藍涂物飲之味甘酸治諸疾池傍小穴形似初月穴中或燃出黒烟雨土沙或白雲金光映徹現鬼神形赤黒色兼和三年季春垂珠簾雨玉四方貞観五年秋白衣神女出現雙立舞遊時火炎揚有圓光即祭之号火御子古老傳云昔大綱里有老翁嬢共居翁愛鷹嬢飼犬後任乗馬里作箕為業竹節中得一女其長一寸餘奇之裹綿養之経十六月漸長成能行歩容貌端嚴言語和雅于時天子詔諸國撰美女令獻之采女使者至駿河國冨士郡乗馬里病老翁宅終夜有光使者怪問曰何故道夜燃火哉答曰我女之光彩也使者窺之其女甚美也於是謂云天子求女汝誠當矣女不從使者奏事于時女語父母曰親子之愛養育之恩誠重誠深雖然我久不可住今我登山去毋云思慕如何女云常来相見乃上冨士山入巖巳而天子来於此幸乗馬里翁日其車天子嵗歎遂與翁登山休於第五層脱玉冠留此處漸進陟絶頂臨巖崫女出迎微笑日領天子住此因共入崫中玉冠所在積石以為陵云延暦二十四年託日我號淺間大神平城天皇大銅元年立社祭之改乗馬里号一齋宗所謂翁者愛鷹明神也嬢者飼犬明神也〔愛鷹山今云鷹高山〕二神共住新山宮

冨士鳴澤

不二乃嶺にあり 都氏記に昔は神池ありて水火剋して煙はなれ時々雷のごとしの聲をなすと鳴沢といひふじの煙と詠て後世迄も埋れぬを涸く常もせんするも立されど古今の序に富士のけふりもたたずと貫之も書れたり盛りなる今も岩間より絶すしのぶの如く煙立のぼるといへども昔の俤なりんと

万葉

佐奴良久波多麻乃緒婆可里古布良久波
布自能多可禰乃奈流佐波能其登

続古　なかめつゝ思ひもよらすかへらんかへりの鳴沢音むせふなり　後鳥羽院

新拾遺　さみたれに嫌しの鳴沢水越て音や畑にきゆの入ぬらん　慈圓

同　飛かける雲をかけし鳴沢にうつる影に見えぬらん　権中納言雅

夫木　紅葉ちるふしの鳴沢風越て清見か関に錦おりかく　俊頼

同　さみたれに高ねも雲のうちにしてなるさは富士の声のみそする　俊成

無名抄云　五條三位入道いはく、なの長者を論せられしか、ふしの鳴沢と嫌しのなるさとよみたるさの入道と人に知れぬるは、いみしき此道の遺恨なり、しかれ仰しのれ其の事まりなれはあしくおもひわりなきことにあらす

藻塩草云一説に鳴沢はあるさし書てなるさとは云の山よりいさこなる事あり其鳴音を鳴沢とはいふの山は白砂にへなれる事を一定なり人のおそれをなすといへり

一夜の間に上ると云云

田子浦

田籠あるひは田児とも書ん都より清見興津よりむかし清見原と乃海きの總称なるへし

万葉　後居而戀作不有者田籠之浦乃海部有申尾

珠藻苅々

拾遺　田子乃浦にかすみのふかく見ゆるかな藻しほの煙立やそふらん　赤人

古今　きのふまて田子の浦波かね見あれともしらぬはしるゝかな　読人しらす

新古今　沖津風夜さむになれや田子の浦のあまの藻塩火たきまさるらん　讀人

続拾遺　田子の浦の岸まて埋むふしの雪も水にくたくる　信實朝臣

風雅　たちのほる煙のなかに五月雨に絶ぬふしの煙なり　家隆

新拾　五月雨のふる江のむしろに夕暮のかゝる田子乃浦浪　法印定圓

続千載　旅人のたゝぬ日もなしあれまつの田子の浦波　俊成

草庵　あし浦やふしのたかねの雪見えてなみよりたかき白雪　頓阿法師

家集　わか思ひはふかき田子の浦浪のしつむ時もなし　源信明

新撰内裏侍従殿色紙形に　白波の見ゆるかせをくみ寄のかゝる田子の浦波　亀井左衛門督雅盛卿

冨士の根の雪のなみもつきぬ田子の浦浪　又次法師

焦思塩竈蜑空烟世路艱難最耐憐生愛風光多子蟾頭潮汲月明還　澤庵和尚

続日本紀天平勝寶二年駿河國守猶原造東人等於部内廬原郡多胡濱獲黄金獻之云云

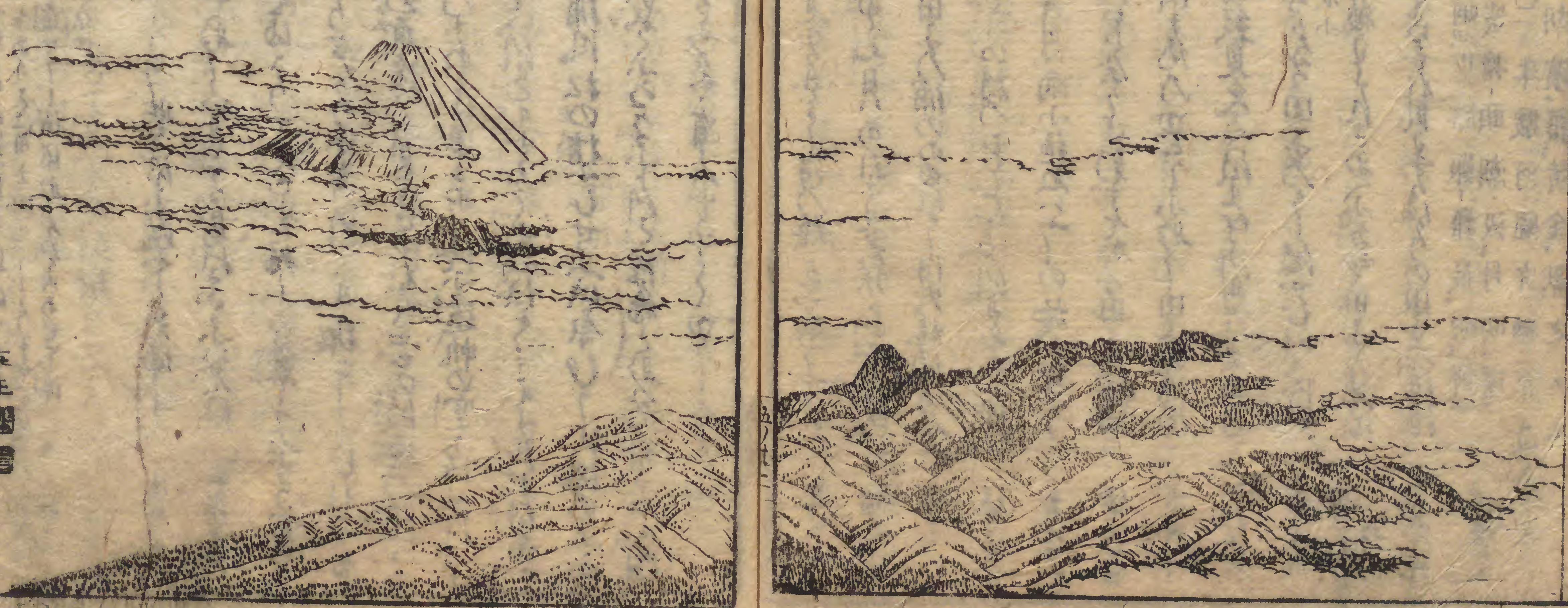
田子浦

亘水東連天拍海門杳
生愁巌空嶂嶽點綴
房浦舟窗龍戸青煙細漠
鹵中浮人家依蹤竹漁笛
過孤洲蒼壁忽斗絶
峴著危棲僧塢在前見
林蒼隔陽幽逕通争棧
汎覧不暇酬山水雖雅好
遠客可少西田江楓合楚思
石無憶謝康樂之瑞雲
西延首暴良儔清涙徒
盈掬憑寄恨東流

僧 六如

嗚呼
ゝ富士
釋迦のまれし
過かなし

藏斎



在正

冨士沼（ふじのぬま） 吉原の北にあり富士八湖の其一つ丙辰紀行に羅山子の口ずさびの碁
〜按ずるに昔は此儘東西三里余もありて冨士川のかゝりまで続く備へたる平氏の
軍勢水鳥の羽音に驚き敗走せしも此沼なりと今はあせて纔の沼となり
わづかに浮嶋(?)の鍛冶(?)四ツ屋柏原の
茶店より出して舟(?)あそびなり

夫木
春草はかりそめの原にかくれ沼に駒やとゞめし　源仲正

宕治(?)百首 浮嶋原にて
水ちかき沼のやゝ荒いかなる島ぞさすらふ(?)代　前僧正(?)

光行紀行
浮嶋が原はいづくよりも勝りて見ゆ北は婦しの麓にて緑のかけを
ひたして空も水もひとつなり芦かる小舟所々に棹さしてむれゐる鳥
おほくさはぎたり南は海の面遠く見わたされて雲の波煙の浪いと
ふかき眺なりすべて孤島の眼に遮るなく終に遠帆の空につらなれり
臨むこなたかなたの眺望いづれもとりどりに心ぼそし原には塩屋の
煙たえだえ立わたりて浦風松の梢にむせぶ此原むかしは海の上に
うかびて蓬莱の三つの島のごとくにありけるによりて浮嶋となむ名付けたると聞
にもおのづから神仙の栖にもやあるらんとおくゆかしく見ゆ

夫木
ふじ川も波の入江の姫しまの根の煙も空にうかれ鳴ら原(?)　光行

左冨士（ひだりふじ） 吉原の駅より五町許東の方中吉原といふ所より西へ二町斗の間は東へ(?)
左冨士といふ是は江戸より京師に上るに都て右の方に冨士を見て
行くに此所にて道の非規にまがりて左の方に見ゆるより此名あり上下
京師より江府に赴く時もこれに同じ

元吉原（もとよしはら） 今の吉原駅初は此所にあり砂山地蔵香久山妙法寺といふ日蓮
宗の寺あり又毘沙門堂あり此尊像は聖徳太子の御作にして長八尺
肩上に聖徳王の尊像立給ふ初は江戸にあり
又香久山稲荷明神の祠あり

鎧石（よろひいし） 妙法寺毘沙門堂の前にあり長サ壱間許幅三尺
形鎧に似たるゆへ此名あり

手児呼坂（てこのよびさか） 元吉原四ツ屋にあり八雲御抄夫木集藻塩草
倶に駿河国に入

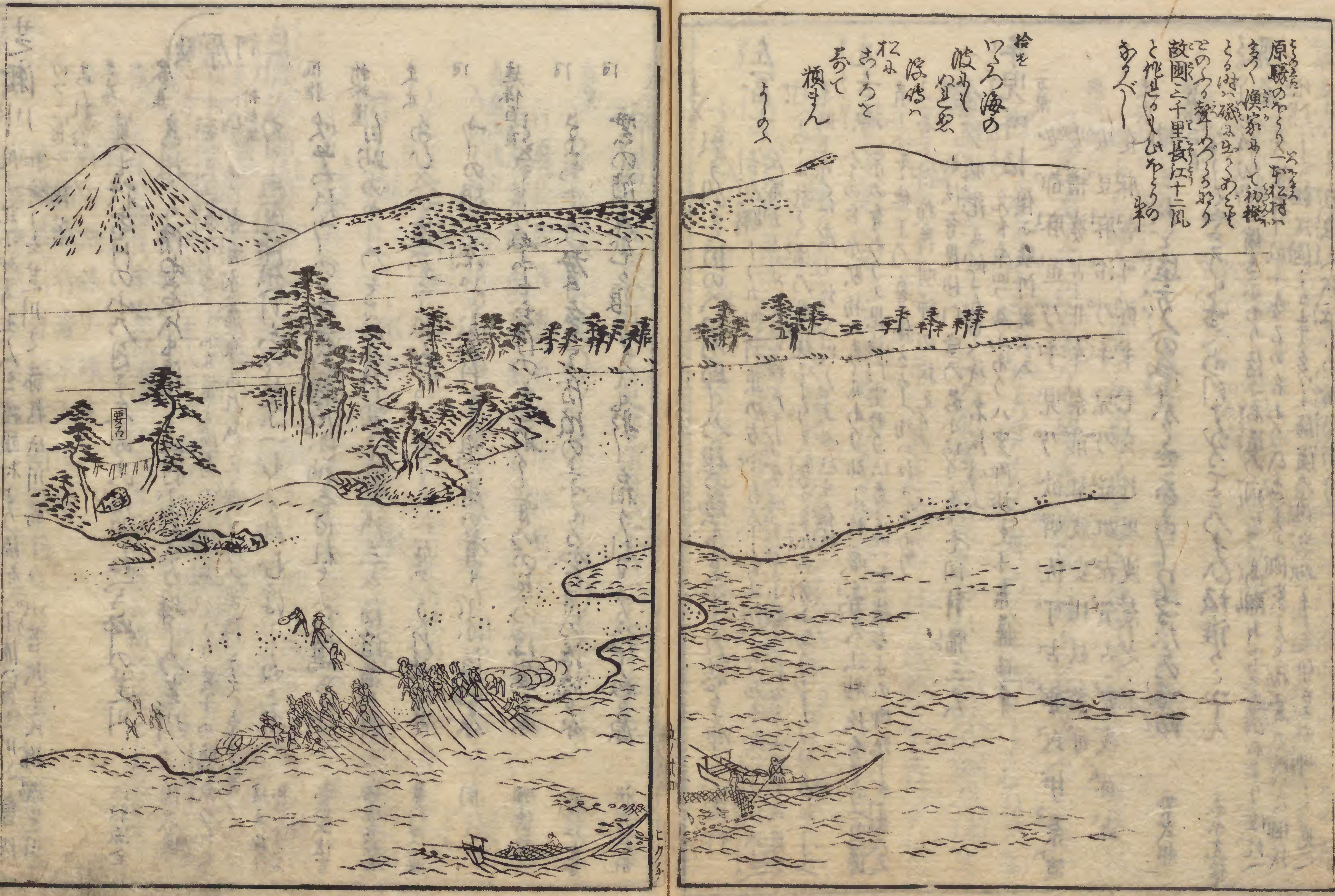
一万葉
安都麻道乃手兒乃欲婢佐可古要氐伊奈波
安禮婆古非牟奈能智波安比奴登母

同
安豆麻治乃手兒乃欲妣左賀古要我祢氐
夜麻尓可祢牟毛夜抒里波奈之尓

夫木
ゆらがと遠方人の聲かくせかぜまつ(?)しるたちの呼坂　紫式部

寶治百首
いまよりはとるべき(?)あれこそ(?)てこのよび坂誰かこゆらん　藤原光俊

要石（かなめいし） 一本松村の濱辺にあり傍に石造の祠あり高潮打よする時此石より陸地へ
波うちよせず是故に要石の名あり此辺に漁家ありて猟業の比(?)は大に細(?)
ふかく鰹を漁する事多し海濱の風景は(?)して伊豆の岬も見え
又まうく駿浪天に浮むの勝景なり



原驛のひがし一本松村ハ
多く漁家にして初秋
よりは磯に出てあみを
ひく聲ゆゝしかり
故國三千里長江十二帆
と作りしもかゝる景の
類なるべし

拾を

つゞく海の
波にも絶えぬ
浮鴨は
松に
あらしを
寄て
頼まん

よしの

芝瀬川（しばせがは）風土記にあり土人云猪頭村より流れて下流は富士川に會る和歌には芝川と詠む此川筋より海苔を生ず謂芝川のりと云富士海苔ともいへり

夫木 夏も猶雪けの水の月さえてきよみかねぬる峰の芝川　法眼源全

家集 高根より消ぬ雪かも流るらん月にさゆる峰しの芝川　源氏真

駿河 原

浮嶋原（うきしまがはら）は浮嶋か原ともいふ小して富士沼南は大洋渺々として其中の曠原なれば八此名あり原吉原蒲原これは三驛より沼津まで三里半

新勅撰 あしたかの関路越行人の袖に一むらくれむ浮しまか原　後京極摂政太政大臣

風雅 吹のほる富士の高根の朝風に袖しほれ行浮嶋か原　前参議俊言

新拾遺 白妙のふしの高根に月寒て氷をしける浮嶋か原　源道長朝臣

夫木 急ぐ人の道ゆくくれもありしとにふしのうへの浮嶋か原　安嘉門院四條

同 ふしの根の裾野はなかけて鳴鹿の聲もほとに浮嶋か原　同

建保百首 ときしらぬ雪けの雲の有明の月の浮嶋か原　順徳院

同 さよふかき聲きさ浮波の上にうかぶ月の浮嶋か原　正三位知家

同 雲の波尾花か浪の寄ても秋しむ霜の名を浮嶋か原　従二位行能

千五百番 潮満ちば雪に打越え見つるかは波にたゞよふ浮嶋か原　法眼顕昭

家集 よの中はなかなかうき嶋の行ゐる波にむかし浪分けてぬるゝ袖哉　参議雅経

貞應海道記
行ク客ハ是レ皆浮嶋ガ原此ニ生ズ如ク寄ル不留痕ヲ
雖歳スト身ヲ尚未ダ蔵サ影ヲ帰去来兮無所栖ムル　澤菴和尚

うき嶋か原はるかに名高くきこえしは海中にありしとぞ野径と佳草むらむらたる木の林あり遥に出れて人煙片々と絶えて又新樹維深て隣たえふみし東行西行の客人あまた来たりあれば村南村北のふもとたゞ山海の眺望

白隠禅師蹟（はくいんぜんじのあと）

原の驛鶴林山松蔭寺といふ禅宗臨済家の僧を當驛中長澤氏の子にして穎智聰明の者なり十五歳の時松蔭寺にて得道し京師にいたり諸山に至り又尾の名濃の巌に止まりて菩提の妙理を究め三界門をおさめ四衢の道に至り遁世の智識なり終に明和五年十二月十一日寂す年八十四諡は神機獨妙禪師と號す寺より後住は存命の時海遊の書あり世に行ふ又二代遂翁和尚も亦寺の識の名僧なり諡は宏恵妙順禪師と號す白隠和尚行状あり委しくは書左に著す

白隠禅師語録中頌古

清浄ノ行者不レ入ニ涅槃ニ
間蟻争ヒ引ク青蜓ノ翼 新燕並ビ休ス楊柳ノ枝
山婦携テ籃ヲ多ニ菜色 村童掄テ篲ヲ折ニ疎籬ヲ　白隠和尚

深山佛法

深林漏月寒猨叫、舊巣受風宿鶴鳴、烟靄軽浮補岸闕、藤蔓倒掛引薪行　白隠和尚

偈頌

示徒

活埋自性葛藤窟、刺殺己靈荊棘林

青菓黄菌白蘿蔔、紅爐猶泣止啼金　同

或問死後斷滅乎不斷滅乎、予云、即今問著底是斷乎是常乎、又示偈

夢裏明々有六趣、了時無一點精魂

善星纔起斷常見、生入泥犂永劫昏　同

駿州原驛松蔭寺

勅謚神機獨妙禪師白隠畧行状

師諱惠鶴、號白隠、駿州原驛人也。俗姓長澤氏。以貞享二年臘月廿五日生。幼而頴達。年甫十一、隨母聽僧談地獄苦報、忽發求法之願。年十五歳辭父母出家、因松蔭寺單嶺傳公薙染。十九歳叅問于諸州老禪。三十一歳歸郷、嗣法於透鱗承公、遂住于松蔭寺。元文五年庚申春、許唱虛堂録、妙機英發、名聞于海内、參學之徒數百。後應四方之請、講經録者凡五十會。帝子諸侯延師聽法無虛歳。明和元年甲申春、就本院提唱大應録、參徒以千數。五年戊子冬罹疾、端然而寂。實十二月十一日也。享年八十四。瘞遺骼於寺之巽隅、扁塔曰荊叢。嗣其法者龍澤東嶺、延慈、松蔭、遂翁、元盧也。所著槐安國語、闡提記聞、息耕録普説、荊叢毒蘂、及國字法語、遠羅天釜等若干巻。行于世。明和六年六月八日敕謚神機獨妙禪師

師歯迫山（しはせやま）

浮嶋原の側にあり

万葉　荒熊之住云山之師歯迫山責而雖問汝名者不告

夫木　あらくまのすむてふ山のしはせ山せめてとふともいろにそけしかりけん　[illegible]

興國寺古城（こうこくじのこじやう）

原の東今沢村の北の方にあり。篠山といふ。當國太守今川氏の持城也。天正の比甲州の穴山梅雪の家臣保坂掃部といふ者守る。小田原合戦の後中村式部少輔に此國を賜ふ。家臣川毛久左衛門是に居住す。慶長六年天野三郎兵衛康景拝領し、同十二年三月九日天野が家人同國原田村の郷人と論じて是を殺し、代官井出甚助聞之官に訴ふ。康景が非道露顕して後駿府を出奔す。其後當城破却に及ぶ

阿野禅師古蹟（あのぜんじのこせき）

足柄山の麓井出里といふ所に阿野禅師ハ右大将頼朝卿の弟、かつて阿野禅師全成といふ。

東鑑云

建仁三年六月於下野國誅阿野法橋全成云云

或井出村大泉寺といふ禅寺に禅師の遺物の什寶あり

阿野細江（あののほそえ）

阿野は井出村にあり。水源足柄山より流落て富士沼へ入、末は海に注ぐ。蘆荻草ふかくありて古詠聞えず

井出館古蹟

井出里にあり右大将頼朝富士の裾野に狩し給ひて士卒に屯させし所なり其時曾我兄弟父の讐工藤祐経を討し御館を騒し名れし諸士出會相戦ひ終に十郎ハ仁田忠常に討れしかども五郎ハ五郎丸に生捕れ庭上に引る右大将直に對面有て誅せらる其比十郎祐成が妾なりし虎といふ遊女井出館とよんして二宮社に通ひしかども三浦氏おて車返しより本松原は細くいひまて浮嶋が原にもおもむきしよりして井出里に赴んとてうち惑ひて此へ六七町ゆけばあれこそ十郎殿の討れさせ給ふ井出の屋形の跡とて行き又いはれにあらぬ松の中こそ五郎殿の誅せられ給ふ所なりと申せば虎御前おもひしかなしぶの涙ますなり

露ものこさず消なしぬる物を尾花の末に松風ぞ吹

竹下道

富士の裾野にあり一説に嶽下道なりと下河相両国の堺なり建武二年十二月十一日新田足利の両陣此所にて戦ひし事太平記に見えたり

續拾
あしがら山乃紅葉に分きて一夜宿かる竹の下道　平長時

風雅
はれかたの山の嵐の音たてて花乃雪ふむ竹乃下道　中納言為相女

同
消えて夜の関の戸おそく足柄の山本くらき竹乃下道　藤原頼成

横走関

富士足柄の間にありいにしへの東海道之清少納言枕草紙に云関ハ横走の関又朝野群載にもあり富士の麓にしつらえて直道の要衝なりし横走りを走れに對しる名なるべし

未本
いかにせんさくもさるて行きゆく横走の関人の心は　源仲正

新羅三郎義光は
源頼義の三男にて
笙を好みて
奥州に武衡家衡
しかば後三年の
軍起りて八幡太郎
義家大将として
擭英林

前九後
三従遠征
義光素自
巧吹笙
尋蹤為遂
源公子
妙曲再聞
王鳳鳴
右愛鷹山
記新羅義光事
熊尚之

愛鷹山（あしたかやま） 又蘆高或は足高或は足柄とも書り古来より名所集相模国とも載れど原より小の方三里にあり

然れとも冨士に連り原駅より近けれとも

縁起に云延暦廿一年三月雲霧朦朧る事十余日にして此山出現せり故に新山といふ山頂の形猶鷹の如し依りて愛鷹山と富士とのあはひむらの東海道の道より見へ関より冨士の麓を通り足柄を越ては箱根山へうつりぬ此間に横走関足柄関あり今は絶えて此道あり甲州の往還とす

万葉

とぶさたて足柄山に舟木伐り木に伐り行きつあたら舟木を　満誓

新後撰

旅衣しくれてとまる夕暮に名のみ聞き行くあしからの山　従三位経基

玉葉

岩かねを伝ふさかちの高まれは雲のかけふむ足柄の山　為家

新拾遺

あしからの山路の月に峯越てあくれは袖に霜を残れる　藤原成茂

足柄関（あしからのせき）

関をあしからの関 あしから山上にあり東海道にあり 清少枕草紙に云

新勅撰

あしからの関路越行しのゝめに一むらかすむ浮島か原　後京極摂政良経公

後拾遺

名にたかき関の戸さゝぬ須磨の秋月にも越えんあしから山　家隆

同

秋までは嶺の高ねに見えし雪はかてとこめる足柄の関　藤原光俊

新拾遺

しくれ行雲は外山にかゝれとも雪に跡なき足柄の関　卜部兼直

新後拾

行人の心かよはゝ此関守神もうひやなかるらん　藤原行朝

足柄神祠（あしからのしんし）

神主沖津氏

神社考云足柄明神昔赴唐其妻神独留守三歳明神帰朝妻神色白肥美明神曰思慕之情待帰之心必可瘦今何肥而麗哉不思我也遂去妻神

冨士人穴（ふじのひとあな）

足柄山の麓冨士に続きたる人穴といふ建仁三年六月三日仁田四郎忠常鎌倉将軍頼家の命を受て冨士の人穴に入し事人口に膾炙れ

北條記云

建仁三年六月三日将軍頼家卿駿河国冨士の狩倉に赴きたまふ山の麓に大なる穴あり世の人これを冨士の人穴とぞ名付たり此穴の奥を見極めさせんがためにそ仁田四郎忠常を召て重宝の御剣を給り海を渡りて主従六人穴の内へ入るに奥を極め来るべしとの上意にて忠常畏まつて御剣を賜り御前を罷り立て主従六人穴の内へ入る次の日巳の刻に忠常人穴より出て帰り来る往還既に一日一夜を経たり将軍御前に召て聞召るゝに忠常申すやう此洞甚狭くして踵をめぐらす事叶ひ難し纔に一人通るべくして心のごとく進み得ざれど又其暗き事いふばかりなし主従各手毎に松明を

焼し互に聲を合せて行往に路の間を水流て足を浸ス蝙蝠幾千と
なく限なく火の光に驚きて飛翔り行され満々たる色黒き物は其の
常に白ん蝙蝠も亦少なからず水の流に随ふて小さき蛇の足に行き纏
ほく事深なし力を拔て切流しく進み行に或ハ腥臭き臭を衝て
嘔噦せしむる時もあり或ハ芳しく薫來りて涼になる事もあり奥ハ
漸々に廣くして上の方ハ何やらん色透通りて青く氷柱のごとくなる
物垂下して見へたり郎従の中に物に心得たる者申けるハ是ハ鍾乳とて
石薬之仙人是を取て不老長生の薬を煉と傳聞しが語作ハ又歩行足
の下俄に雷のとどろく音して千人ばかり一同に鬨を作るを聞こそ是ハ
定て修羅窟の音なるべしと恐ろしき事に存じて猶行されば
暗く松明を焼し續けども廣き所に出たり四方ハ黒暗幽々として
遠近にハ時々人の泣聲聞へ心細き事さなりし迷途の旅路も
向ひたどり行く心地ぞするかかる所に一の大河に行かかる事何べき哉

も足ハ穴ぐ漲り落る水音も其深さ測瀬も定らねバ逆巻水に足を
浸し入たりけるに其水の早れ事矢の如く冷なる事極寒の氷に過たり
紅蓮大紅蓮の地獄の氷ハ是なるべし川向ハ其遠サ七八十間もあらん其中に
松明のごとくなる物向ひに見へて光かがやく火の色中にも尊き光の中に容貌
奇異の御姿ありて立給へり郎従四人ハ其体に倒れ伏て死れ
忠常ハ御霊を礼拝するに御聲幽に教させ給ふハ汝事有て郎從し
給ひし御劔を其川に投入よとハ御姿ハ隠させ給ひ忠常ハ命助り
出へしと申れ頼家卿聞召かの其奥を定べく天地の外の世界なるべし
重て渡し舟を絶せ人数を多く往かうしく見届くべしと給ふ
古老の人々かたられしを聞て此穴ハ浅間大菩薩の住所なりと申つたへ
むかしより遂に其中を見る事能はずとぞ傳へし只今加様に事
破りなるハ将軍家の御身にとりて御慎あるべき事なれば恐し
くしぞ松諾る

文覺房ハそのかみ院宣を申請て頼朝に義兵を揚させ今又平家の末なる六代御前誅せらるゝつたなを鎌倉に下て頼朝に乞命乞の免しを申請く今と助く此上人ハ源家平家のうへにかゝる弱なきを憐む本の甚しきなりと言ふべし阿羅漢向也羅漢果の佛道といふべき

八重山（やへやま） 足柄のかたへの山の続きなりともかきたりけりとあるなし
かならしも所の地名ともあらさるへし

万葉 上總國朝集使大掾大原真人今城向京之時餞之歌
安之我良乃夜敝也麻故要氐伊麻之奈婆
多禮乎可伎美等弥都々志努波牟　郡司妻等

新千 さらた今都も恋し足からの関の八重山形る色そはて　津守國量

名寄 降つもる雪や八重山ふかくしてけふ清そうしれあしから乃関　中務卿親王

丸子神社（まりこのじんじや） 東間門村にあり 延喜式内社 祭神國常立尊 此所の生土神とれ例祭 二月十六日 六月十七日

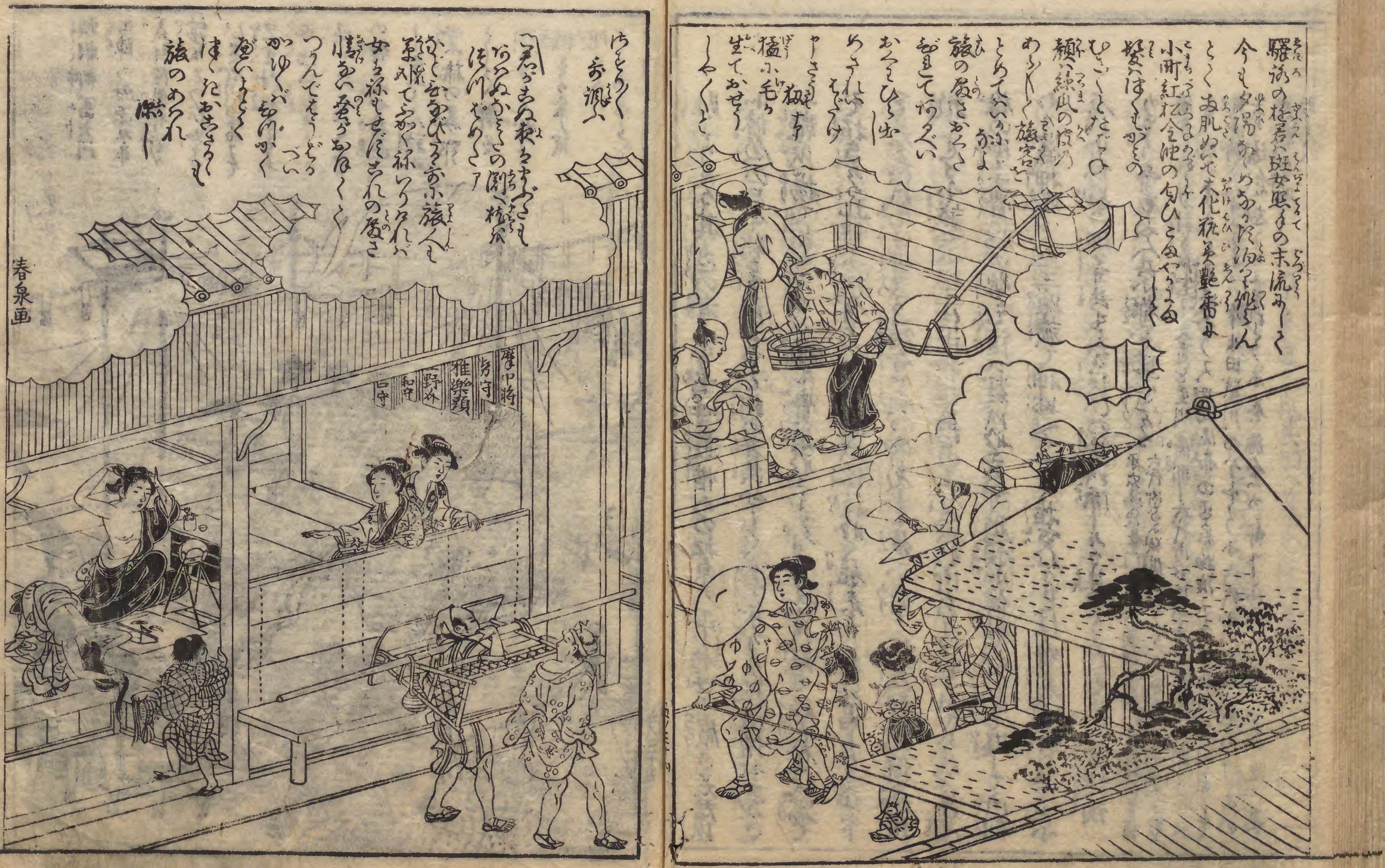
千本松原（せんぼんまつばら） 沼津の駅の西南五反田村の海濱の松原なり 天正の比武田勝頼合戦の砌として此松原伐拂ひぬ 今の松林は後世植継する松原なり 六代御前の石塔あり 祠の内にはさまに誅せらるゝを 文覺上人頼朝に命乞して 助り後に又鎌倉にて誅せられける

光行紀行
千本松原といふ所あり 海のなぎさ遠からず 松はるかに生わたりてみどりの
かげきはもなし 沖には舟どもゆきちがひ 木の葉乃うきたるやうに
見ゆ かの千株の松の下の雙峯寺 一葉の舟の中乃萬里の身と
作れるも 是もこゝろありて眺望いづくにも勝たり
見わたせば千もとの松のすゑとほみみどりにつゞく浪の上かな　光行

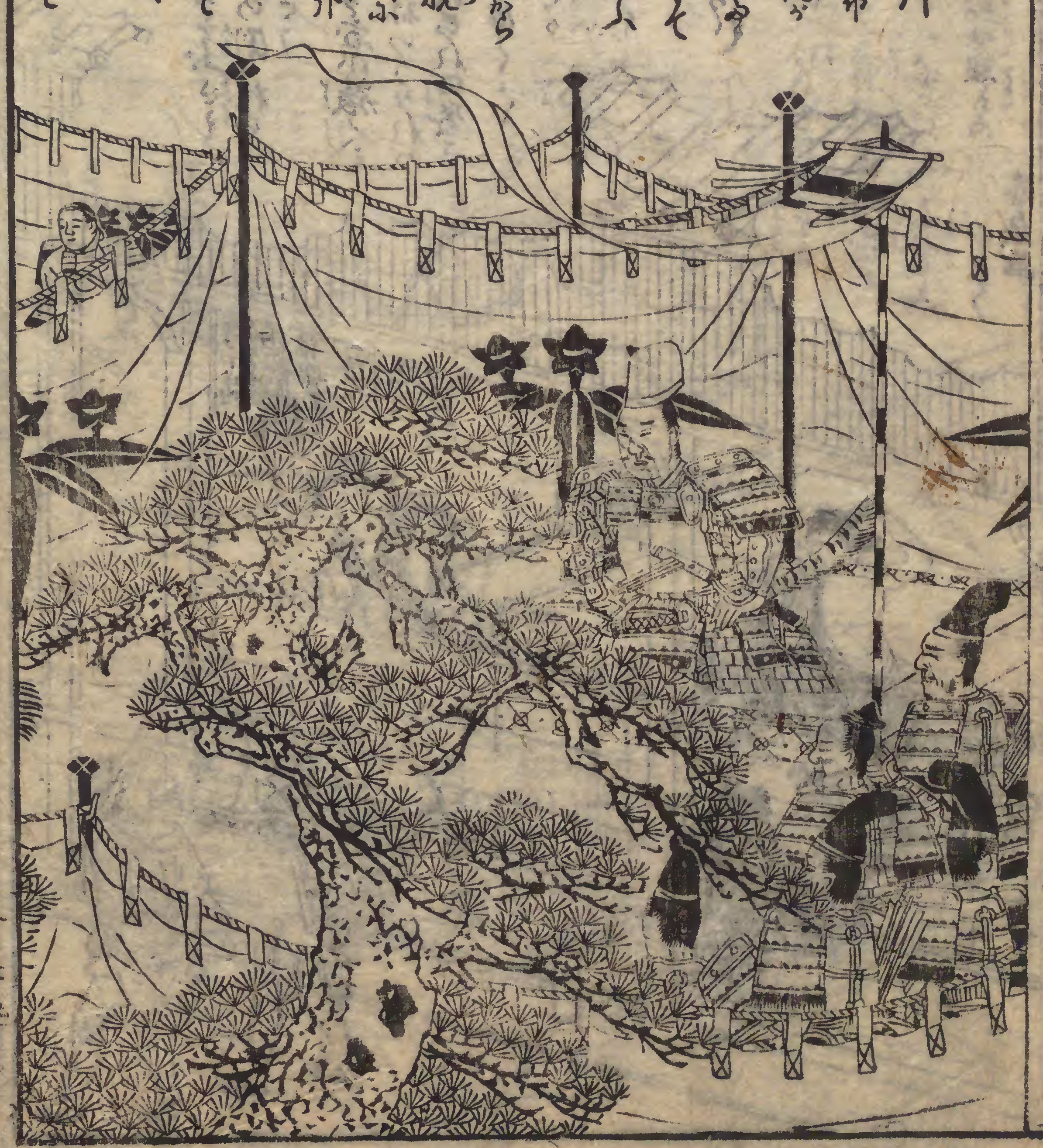
平家物語六代大意
去程に北條四郎時政鎌倉殿の御代官として都に上り平家の子孫を
亡さんとて小松三位中将維盛卿の若君六代御前十二歳になるを捕へ
六波羅にて既に誅せんとせる所に高雄文覺坊廿日命乞延して鎌倉
に下向す 早廿日も過ぬれども何の沙汰も聞えざれば北條時政六代御前具し
て建久四年十二月十七日暁雲井を餘所に顧て名残の東路を逢坂の
関打越て大津の浦粟津が原もうちすぎ 野路も山田宿々打過
やうやう駿河國にも成しかば若君の御命も今日限とぞ千本松原
といふ所に御輿かき居させ若君おろし参らせて敷皮にすへ参らせ
馬より飛で降り若君の御傍近く参つて申されけるは 道にて文覺
の聖にや行逢ふとおもはれまで具し申て候へど 山のあなたまでは鎌倉殿
乃御心中も計難ければ近江國にて失ひ参らせたる由披露仕らん 一業所感
の御身なれば誰申共も叶ふまじと申されければ 若君兎角の
返事にも及ばず 斎藤五斎藤六を召て宣ひけるは汝等都へ上り

我道て斬れたりとも迯るゝ其故ハ終に遁ある所ならざれバとても叶はじと
思有様を聞のよりく歎悲ミあらで後世の深きも感じ鎌倉まで送付
て上るべき中に十七宣へども二人の者共涙をはらはらと流し良有て斎藤五
泪を押て申けるハ君の神も佛も感せ給ひぬ後命生て再び都へ
帰り上る事も共ならバ又泪を押て跡に残りし若君今ハ角と見へ
し時御髪の肩に懸りたるをおさへ見しき御手にかく落へかれ越させ
の人守護の武士共見参せてお那最惜き御心の中れぞやとて皆
鎧の袖をぞ濡したる厥后若君西に向せたまひて掌を合せ高聲に十念
唱へさせ給ひて頸を延てぞ待れける狩野工藤三親俊斬手に撰れ
太刀を引側めたの方より若君の御後に立廻り既に斬んとしけるが目も
くれ心も消果て詮方なく太刀を打付るとも覚ず御後に付其心も
られバとて太刀を捨てぞ涙にくれける暫く候ひて斬なれきれと斬人と撰ぶに
に寄に墨染の衣着たる僧壱人月毛なる駒に打乗て鞭を打てぞ

馳来る其急の者とも嗚呼最惜ある松原の中にぞ世に厳き若君を
小條殿の只今斬奉ると所の者共むらむらと走集りたれバ此僧心えがさ
に鞭を揚て招きけるが猶も覚束なさに着たる笠を脱て指上聲を揚て
ぞ招きける北條子細有とて待所に此僧程なく馳来り急れ馬より飛で下
り若君を乞請奉る鎌倉殿の御教書是に有とて差出れバ北條是を
披て見るに誠や小松三位中将維盛卿の子息六代御前を尋出され候ひとも高
雄の聖文覺坊の申請るゝ疑をなさず預け奉るべし北條殿へ頼朝と遊して御判
あり北條押戴きて二三遍讀て神妙々々とて指置けれバ齋藤五齋藤六ハ言に
及ばず北條家の郎等共も皆悦ひの涙をぞ流しける其より若君ハ文覺坊預
りまゐらせ京都へぞ還りける
平家物語長門本より頼朝て薨し給ひて後文覺坊
六代御前を扱ひ謀反を起し又平家の残黨と聚まりしを
鎌倉小條より討たれ死し文覺を豆州へ流刑し六代御前ハ
捕られて斬られし後に平家物語にも相模の田越川原にて
終に斬られける今も田越川のかたはらに六代御前の墓ありとの
事鎌倉志にも書れたり未考鎌倉の郡下に見へたり此川も其
是非を分明
ならず


春泉画

頼朝卿冨士川
出陣の時源九郎
義経陸奥秀衡が
館よりのび出来り
こゝ黄瀬川の宿にて
兄弟対顔しけるハ
平治の乱より
絶て久しかりしから
の親しさや喜悦
しゆつてん詩に
棠棣の蕚鄂
としく韡々
たらざらんやと
蕪ぞる手紙
作りつるハ
ちまたらうと



駿河 沼津

三嶋まで壱里半。当駅中浅間町に冨士浅間神祠あり。例祭九月十五日。入社頭に徳田長神祠石あり。又神寳に雌雄の鶏鵡石あり。大サ二寸余○
新田町に山王神祠あり。例祭九月九日。社内に冨士の牧狩の時用ひしと云。又大釜あり。来由詳ならず。古代の物にて古あり。
沼津に牧狩町の小の地名と東鑑に六国及び車返牧狩御所と記れ
三枚橋いにしへを高橋なり

車返し
光行紀行
車返しといふ里ある家に宿りたれば細駒かやいとせまくいぶせきに、その棲や
衣のやどりかとみえくまなきにむしろもかたはらはちり床縛戒人の聲や
乃旅寝もかくやありけんと覚ゆ○

古へ此所はむかしの昔語りせしいとゞあはれや袖ぬらさん

貞應紀行
車返といふ所あり。此所を過ぬる所は蟷螂がみちにわかちあひ人の道をもさまたげ文あり
昔鸚児が土城作りて孔子に逢へるむかし小童の路中に小家を作りて孔子の通るをとゞめし事に
のりし謙られたる小童の云。車は家の所をよぎて通る下にいまだ聞ず家の車
に応ずるをと孔子あらはれて車をかへしてさぐりけり
為又勝母の閭には曽子ふたたびも進まず通らん。曽子は孝行の者なれば
車は返して嶮岨の地なれば大行路といひ流通し。もとの道にかへしくかへ
通れば騎馬の害なれば
たけれ通りぬ

冨士沼
沼津の東里瀬松原二ヶ所あり地形にて低し。愛鷹山に遮れて
冨士見えたる地なれば冨士見えずとか呼ぶ。むかし此所に車の来たる程ひとは見ゆるなどかくはじめけん

亀鶴塚
二條家の東石田村亀鶴山親鸞寺にあり。柏子亀鶴は建久の頃
此所の妓女なり。冨士の牧狩の時に工藤左衛門祐経と
門客となりてさる事の物語に見えたり。此寺の墓は鎌倉の其基の他にして
亀鶴が守本尊とぞ

黄瀬川
石田村の東ありいにしへの駅也。遊女亀鶴もこの所に住し事
東鑑并に曽我物語などに見えたり

東鑑曰
承久三年七月十三日。上皇鳥羽行宮より還御。隠岐國に御興前後中書令入道中
納言宗行(甲斐國浮島原に至て)
... 勇士囲御輿前後。中書令入道
納言宗行卿、過駿河國浮嶋原。按察卿光親卿也。昨日人首
相逢于途中。黄門問之。答浮生之悲。非他
之間、拾主君遺骨帰洛之由。猶不測若出
上弥消魂。不可遁死罪事者。兼以存中
於虎口有盲亀之命。乎由。猶殆特之處。過同人
已定訖之間。只如亡。察其意。尤可憐事也。休息
黄瀬河之宿之程。依有筆硯之次。書付傍
今日スグル身ヲ浮島ノ原ニテモツヰノ道ヲハ聞サダメツル

宗祇終焉地
黄瀬川の上壱里許に植国山定輪寺と云。宗祇ここにて終りをとりしとなむ。基卒芸記にあり
於菊河驛書佳句。留万代之口遊。至黄瀬河詠
和歌慰一旦之愁緒。云云。宗行
半宗長記に見えたり。又箱根早雲寺に墓あり

辞世　ちる花や鶴の林のつゆかゝるまたとくれぬる身こそうらやむ　宗祇法師

自画賛　うしとみし世の姿をこゝに留めむ花の下に出ぬる　同

誹諧　世にふるもさらにしぐれの宿りかな　同

宗祇法師は紀州の藤氏の姓は三善の氏は飯尾にして洛陽に来り住心殺價に入門下にして連哥の宗匠となり世に鳴ること東野州常縁に従て古今伝授なし宛も洛に帰り猶公条公三条逍遥院実隆卿へ傳へそれより孫名実枝公三光院実枝公細川二位法印玄旨幽斎八条智仁親王中院通勝入道也足軒公是に傳り　後水尾法皇に到て大成しありて九ヶ歳の間に宗祇法師より起りしとぞ

頼朝義経初對顔地　黄瀬川の東長久保村八幡宮の社地之治承四年平家の軍勢富士川まで出陣の時頼朝ここにいたりけるまで来りて陣を張られしが又奥州より九郎義経ここに来りて生長の後再び対面ありし所なり

東鑑云

治承四年十月廿一日武衛頼朝令遷宿黄瀬川給中略今日弱冠一人御旅館之砌称可奉謁鎌倉殿之由実平宗遠義実等恠之不能執啓移尅之處武衛自令聞此事給思年齢之程奥州九郎歟早可有御対面者仍実平請彼人果而義経主也即参進御前互談往事催懐旧之涙中略此主者去平治二年正月於襁褓之内逢父之喪之後依継父一条大蔵卿長成之扶持為出家登山鞍馬至成人之時頻催会稽之思手自加首服恃秀衡之猛勢下向于奥州歴多年也而今伝聞武衛被遂宿望之由欲進発之處秀衡強抑留之間密々遁出彼館首途秀衡失悋惜之術追而奉付継信忠信兄弟之勇士云々

千貫樋　三嶋の駅の西にあり伊豆の水を駿河へ引て田畝の料に賜りたるより此名ありし訪あり国の堺にして凡廿三四間斗の川ありて水より南へ流る其川の上に渡して東より西へ流れ出る樋あり巾を間的長廿七三間許なり常に流水滴々として増減なし初めて山里にて田園の所有て水流自在なれば上方までもきこえし鎌倉の樋といふ此水は豆州の水流駿州へうつりて世に名高しとかや水のなかれ

駿豆両国堺　則此千貫樋の下流を駿州の国さかひとす

箱根駅まで三里廿八町此国都会の地にして商人多く聚し宿の西入口に堀ありて二六中に榎へ小糸御所とあれより南の方に小糸御所の跡あり

伊豆三嶋　三嶋駅中にあり延喜式内名神大月次新嘗

伊豆三嶋神社

蛭が小島も小糸の御所中にたづねられ

旧跡　頼朝公の配流せられし

祭神大山祇命　相殿四坐神社説云天平五癸酉歳漁ニ和漢合運云聖武帝御宇天平五年三嶋明神出現

日本紀曰伊弉諾尊抜剣斬軻遇突智為三段其一段是為雷神一段是為大山祇神一段是為高龗

十六夜日記

ゆくへもしら三嶋の神のみしめなはたゆみなく此世の中にかけてそまつる　阿仏

神代巻鈔云伊豆國賀茂郡三嶌神社攝津國嶌下郡三嶌鴨神社伊豫州越智郡大山積神社此三所俱一神也

末社

見目祠 楼門の外西側にあり。八幡宮 同所にあり。厳嶌祠 池中にあり 二王門の外西側

東五社 船寄社。飯神祠。酒神祠。第二祠。小楠祠 俱に本社の後東側にあり

西五社 草神祠。第三祠。聖神祠。天満宮。大楠祠 俱に本社の後西側にあり

別宮八社 二ノ宮 三嶋駅中宗町にあり。三ノ宮 同駅田町楊原にあり。四ノ宮 同駅小浜池の内にあり。五ノ宮 同駅宮倉町にあり

田川祠 三嶋駅外小山村にあり。天神祠 同境川原ヶ谷村にあり

祇園祠 神領内祇園山にあり。祓所祠 三嶋駅中後村にあり

舞臺 本社のまへにあり。随身門 社頭にあり 豊磐間戸命櫛磐間戸命 左右に安ん。倶に楼門よりは

鳥居 一所ハ楼門の外一所ハ海道の側にあり并石柱。二王門 楼門の外にあり。三層塔 二王門の東にあり

神池 二王門の内左右にあり。鳥部屋 塔の側にあり。神馬厩 楼門の東にあり。薬師堂 本社の後東の方にあり

寶藏。神供所 倶に本社の小にあり。馬場 本社の東側にあり

例祭 七十五度の内大祭正月元日同月十五日四月中酉日八月十六日十一月中酉日 神官矢田部氏 社家三十六人

東鑑云

治承四年十月廿一日頼朝秉燭之程令詣

三嶌社給御祈願已成就偏依明神冥助之由御信仰之餘點當國内奉寄神領給則於寶前令書御寄進状給其詞云

伊豆國御園河原谷長崎

可早奉免敷地三嶌大明神

右件御園者為御祈禱安堵公私所寄進如件

治承四年十月廿一日 前右兵衛佐源頼朝朝臣

光行紀行

伊豆乃國府にいたりぬれバ三嶋乃社のみしめうちをがミたてまつるに松のあらしこぐらくおとづれて庭のけしきも神さびわたれり此乃社しろハ伊よの國三嶋乃大明神をうつしたてまつると聞にも能因入道伊豫守實綱が命によりて哥よみてたてまつりけるに炎旱乃天より雨暴にくだりてかれたる稲葉も忽にみどりにかへりけるあら人神の御なごりなれバゆふだすきかけまくもかしこくおぼゆ

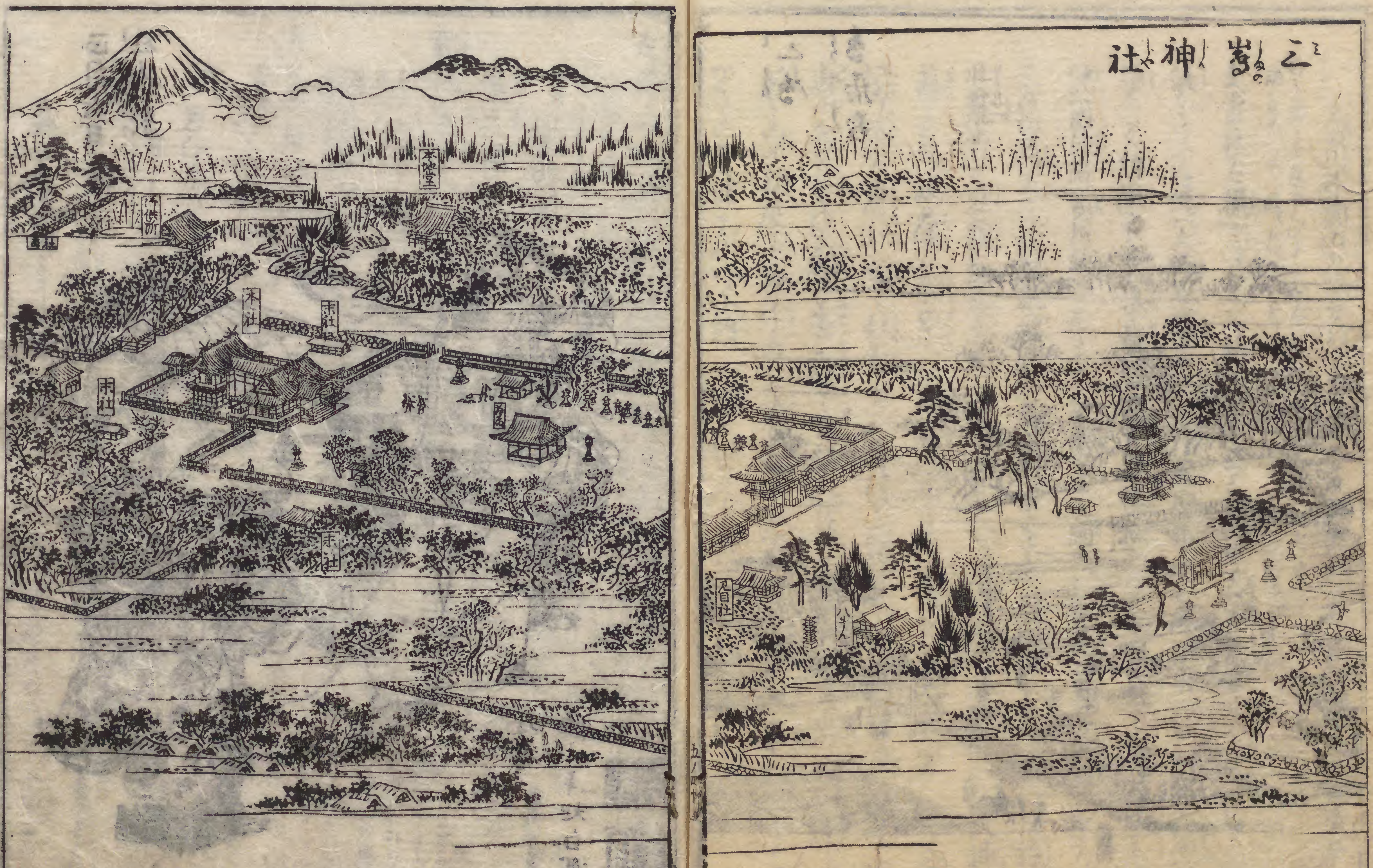
せきかけし苗代水のながれきて又あまくだる神ぞこの神　光行

按るに伊豆の國府ハ和名鈔に田方郡とあり三嶋神社ハ延喜式に賀茂郡とあり又烏丸光廣卿東行の時霖雨にして此駅に到り洪水して箱根へ越るべきやうもなくちかに滞留して此社に祈りたまふ

天の川井関の名にせよ今も三嶋の神ならは神　光廣卿

かく詠したまひしかば神感ましくてたちまち雨止んて晴天となりしとかや

夫当社を攝州豫州三所共に三嶋と称して大山祇命を祭る所なり読にいはく三嶋は大山祇冨士は木花開耶姫にて御親子の神なり且祈雨の神にして神道にも三嶋龍雷傳とて神秘ありとぞされは往昔伊豫より能因法師雨を祈りあけては光廣卿は止雨の和哥をよまる御家の流より三代の将軍九代の執權共に恭禮厚くして田園を寄附せられ宮柱壮麗にして社頭巍々たり此神の使令として神池には鴛鴦鵜わにに戯れ神雞とは鷹鶏群り驛の小川には鱣多く生じて其を柏どもおもうたふにいにしへより暦は制して社家よりおくられしと三嶋暦とりふ神風や豊みてくその恵みにおもむきそ民の名は諷々する松の說にも交り珍の聲は出の音に通ふ都でおうに鎮座し給ふより一千有余年は取れども神徳は日々に新にして世々の貴賤まづ此所に詣して君か代の久しきを祈らぬはあらされと賞き



三嶋神社

走湯山 三嶋より南六里許にあり走湯権現山嶺にあり伊豆御山と称す頼朝公蛭小嶋に於て法華経書写千部の願をおこし出陣急になりしにより八百部走湯山に納められし事東鑑に見えたり本社壮麗にして石階を昇る事三町にして山頂に鎮座す別当は般若院と称す

玉葉
伊豆の国山の南に出る湯のはやきは神のしるしなりけり
鎌倉右大臣

瀧之湯 此町の許山下にあり巌洞より湧出して海岸に流落す其疾き事矢の如し故に走湯の名あり瀧の二所には浴室ありて諸人こゝに浴す

熱海温泉 走湯山の西の方壱里にあり潮の満干に通ひ岩のはさまより湯気甚しくて殊の外熱き湯なりこれを甑にうつして家々にて諸人入湯す 平左衛門 法斉湯 中湯 風呂湯 川原湯 清の湯 等の名あり今宮権現七面祠 木宮明神 天神祠 土人云湯の名は昔は大に湧上るより大湯と云権現の上の町にあり 松木貴僧正の祠は新宿にあり

古々井杜 伊豆権現の西にあり

拾遺
あつまにはなしと郭公まつゐの森といひしそ
右大臣 頼光

月
思ひ余るこゝ井の杜の木にかゝる人の袖もぬれけり
久輔

弁範法師は八幡の宮の事にかゝりて伊豆の国に流されてこのよし五月に内の大弐の三位のもとに遣はしける

続拾
五月闇こゝゐの杜の時鳥人しれすこそ鳴渡るなれ
藤原兼房

返し
郭公こゝろの内に鳴声はきくより人の袖もぬれけり
大弐三位

興小嶌 伊豆の海濱

新後撰 箱根路を我越くれハ伊豆の海や沖の小嶋に波のよる見ゆ

鎌倉右大臣

冨士見平 三嶋より海道筋東へ里許にあり三嶋より今井坂にかゝり船窪と云所ありこれハ冬の日より鶯早く啼初る塚原臼井坂をし帝の山法華坂また七面祠法華題目堂あり大時雨坂小時雨坂越て二ツ谷村下長坂笹原村に宗閑寺と云梵刹ありこゝに一柳伊豆守の墓あり山中迠至る所並山下田への近道これを過ぎて富士見の平にいたる正面に富士山三保の松原眼下に見ゆ

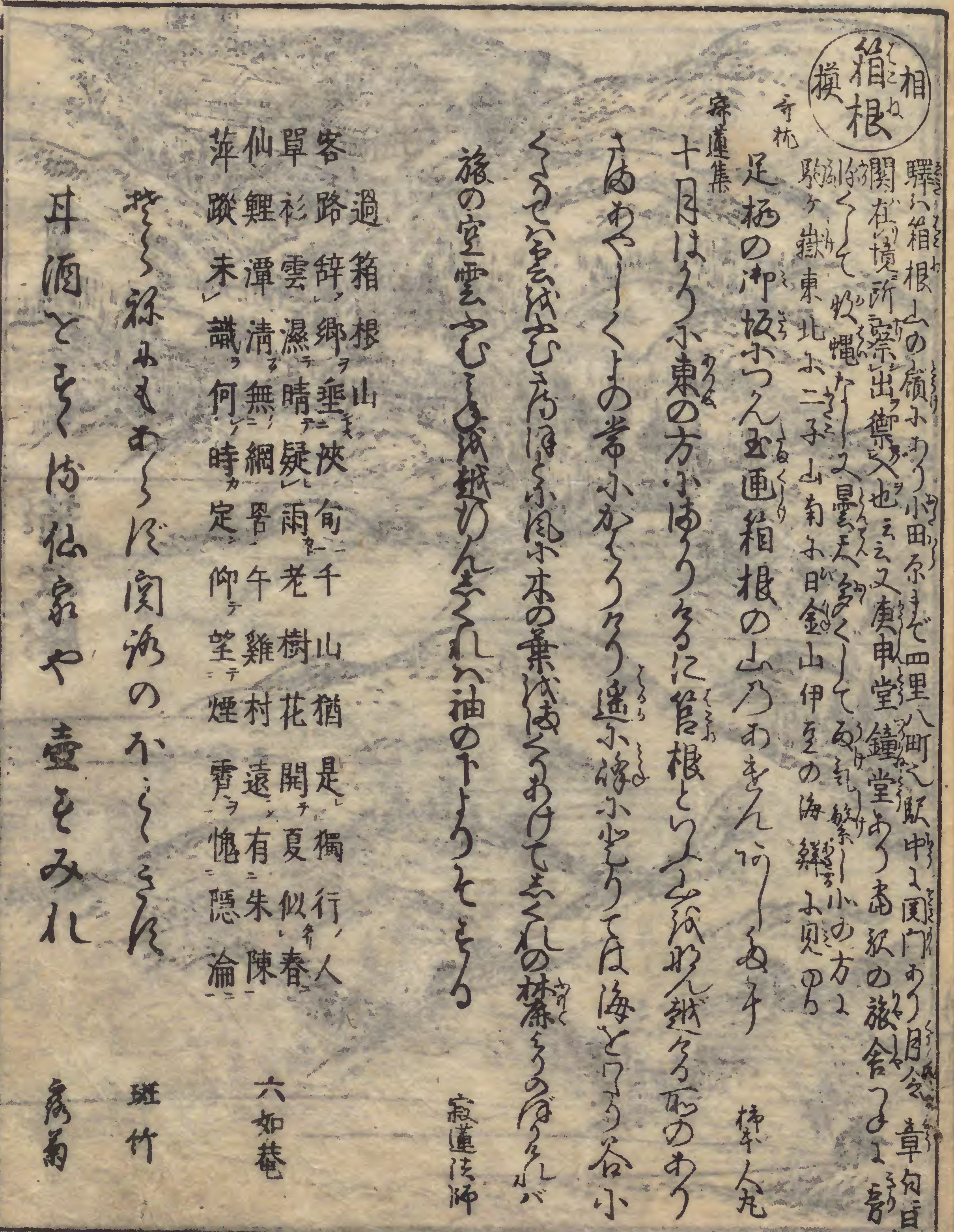
山中古城 ハ見平の東山中村にあり小田原北條の時こゝに城を築き北條左衛門大夫氏勝間宮豊前守等に命してこれを守らしむ豊臣秀吉公小田原征伐の時関白秀次中村一氏等城を囲てこれを攻る一氏が麾下渡辺勘兵衛重綱先登して勇威を振ひ味方の一柳伊豆守討死ス小田原方ハ間宮を初め大勢討死して氏勝敗走し遂に落城す今に堀切町ばかり左の方にあり

豆相両国堺 山中村を過て小枯木大枯木石荒坂をすより豆州韮山の堺なり甲石坂に甲石二ツありこれより東を過て国堺あり

風越臺 国堺のほとりの名也左右双木老杉多しこれより箱根駅まで十八町也釜石坂赤石坂を過て此坂の東の方に山神の森しろあり箱根の宿の入口は芦川町と云ふに駒形権現祠あり無して此山路の左右ニ箱竹ありて自然と繁茂せりこれを刈て京都へ出し煙管の羅宇とす甚性堅くして佳く箱根竹とて名産なり

山路来て何やらゆかしすみれ草

はせを



相模 箱根

驛ハ箱根山の嶺にあり小田原まで四里八町此駅中に関門あり月令章句曰関在境所以察出御入也云云又庚申堂鐘堂あり両側の旅舎つゝき軒をならへて又曇天多くして霧深し駒ケ嶽東北に二子山南に日金山伊豆の海縹渺として小田原の方を見る

寄枕

足柄の御坂にたゝん玉匣箱根の山のあきん何しめ手

柿本人丸

寂蓮集

十月はかりに東の方にまかりけるに箱根といふ山を越けんとするのあり雪ふりくもりて常にかはりて遥に漂にゆりては海とゆふ谷にくるまで風に木の葉はちりて雲の林にのほりけれバ

旅の空雲もとまらぬ越ぬれハ袖の下よりそとまる

寂蓮法師

過箱根山

客路辞郷埀狹句千山猶是独行人

單衫雲濕晴疑雨老樹花開夏似春

仙鯉潭清無網罟午雞村遠有朱陳

莽蹤未識何時定仰望煙霄愧隠淪

六如菴

数ゝ孫ふもおらぬ関所のかくもなし

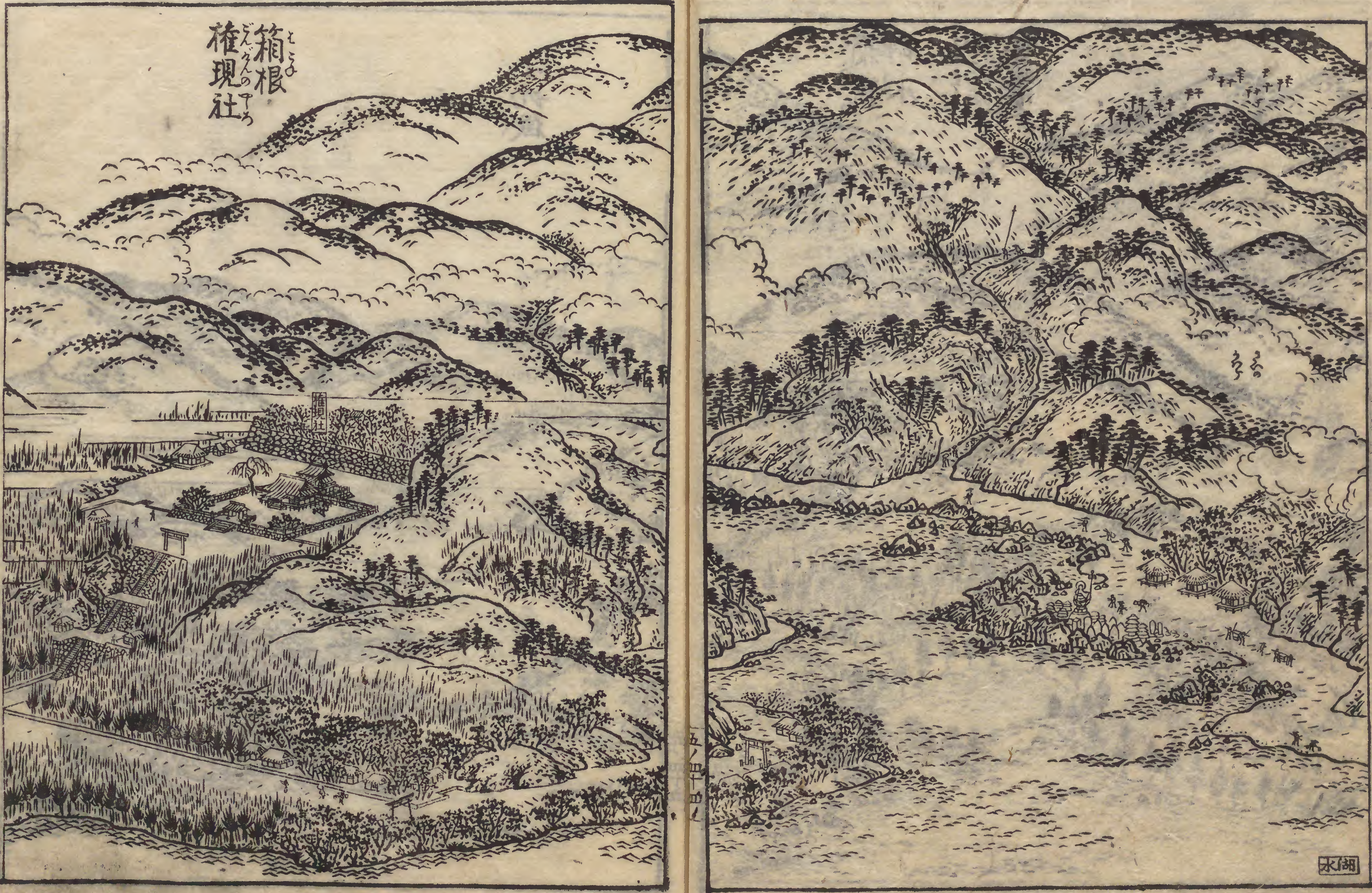
斑竹

甘酒とさく仙家や壺をみれ

寿菊

箱根驛

箱根の湖水
西河原
地蔵堂



箱根権現社

家集
おそろしやほのほの橋をたいまつて
いかなる罪のかかる果そや
泉式部

小地獄
小地獄

筥根湖水 一名芦の湖といふ富士八湖の其一也 箱根の山嶺にあり長サ二里許
巾さ一里余 其中に○九尾崎○石尾崎○二ツ石○諸ケ嶋の字あり
産物ハ鰷 腹赤く鱗魚ハ山中の溪川に生ス 小児五六箱の如き葉に見ゆ

主木
玉くしけ はこねの山乃岑ゆくも 海をれてそらに月なり　芝融

東野紀行
秋ならぬほとの峯にたかき山の中にありてはるかなる海をみるに箱根乃湖水とあるハくすのりの海といふもあり権現垂跡のむかしをひけるもうたかはしき朱楼紫殿乃雲にかさなれる粧ひ唐家の驪山宮をもおもはする礼巌寶石龕の浪にのぞめるハ鐵塘の水心寺をもいふべく嬉しきたよりなれバ浮身の思ひ清まるべくおもはせ身の夕べなれバいのりて法施をなるをそて

うつりゆく
今よりはおもひこそかれあしの海のかれぬくもまに神にまかせそ　光行

目もはゆし雲動く不二の形　闌更

ゆるされぬ女咲くも箱根の女郎花　路通

箱根山を越る日みやこの友に申を送

わさなふよかせも雲助かせく歩行　蕪村

箱根山金剛王院東福寺　箱根山にあり古義真言宗 箱根駅より新屋町葭原
湖辺に墳墓多し三ツ家といふて石河原とりいふあり是に地蔵堂あり
権現坂より元箱根に到る此あたり山深くして雲霧かかり雨と興し其外の幽境なり

箱根権現社　祭神中央彦火々出見尊 左瓊々杵尊 右木花開耶姫命 例祭六月十三日

末社　駒形神 高野祠 熊善祠 大師堂 本社の右にあり 弘法大師を安ず 行者堂 役行者を安ず 側に弥陀観音を安ず

獅子巌　行者堂の御供所にあり 石段の側 薬師堂 石階の下 門内にあり 別当の

親鸞聖人堂　権現社僧に寄て日明朝門おと貴僧来往あり此所にて聖人東国経回の時此所に通りて其夜の宿を乞ひ給ひし所なり 神託に依て待所に聖人来り給ふ 此聖人の由緒詳なれバ 曽我兄弟の饗應をなし 是も神託かせし事なり 曽我兄弟の霊を祀る 又道の傍に曽我兄弟の撃石といふあり由縁詳かなれバ文武太刀金あり 兄弟の時仮に吹く其所に玉祠 山王の祠 六道地蔵堂あり 湖水の汀にあり

それ当山の初ハ聖占仙人幽居の地にして神威を崇め寿齢九百余歳なり 孝安帝の御宇に湖水の中に日代の本を建て相豆駿三国の堺とし 欽明帝の御時に韓国の高根権現を勧請し此山の形梵篋に似たれば

とそ筥根山と号け湖中の怪石は観音巌といひ又一宇は建て寺門
品を誦ハ今湖中の堂嶋これ也廟后役小角も登山し行基大士も
昇臨して東福寺と称し山岳林泉に名境多しかくて都率の内院に
表して四十九所の名に従ふ天平勝宝年中に満巻上人鹿嶋明神
の神勅を蒙り錫を止め当山に練行せる事三千年此時箱根三社権現を
崇め上人を中祖とし諸経の読誦一万巻に及ひしかれとも爾来諸人
満巻上人と呼ふ又湖水の西乃渕に九頭の大龍有て時々風波を起し人民を
悩す上人の除渕に臨んで神呪しめしに毒龍水上に現れ即鉄鎖の呪縛
しめしハ大樹の下に繋れ永く当山の守護神と成ん事を誓る 此樹を栴檀鬱木といふ
今湖中に有之 弘仁七年より万巻上人勅を奉て上洛し帰路に到りて三品楊
那郡に於て入寂れ従弟遺骨を当山宝蔵の仏像経巻ハ至州
田方郡に一寺を建てこれに納む是を来原山新光寺といふ又の名を
小箱根山とも号く其後孝謙天皇より後桃帝まで七代の帝王尊敬有

て神社仏閣巍然より弘法大師慈覚大師もここに止錫し花山院の皇
子豊覚法親王当山の座主職に任せしより此時金剛王院の勅号あり此
法親王の御弟子安慶当山の別当を勤む同弟子行実僧正もここに来りて別当と成
武門よりも田村将軍。源頼義。右大将頼朝。小條時政。義時。泰時もみな尊
恭し曽我兄弟祐経を討し後箱王丸衛緑の太刀も後に頼朝によりて当山
に寄付しめひて什宝となる其外宝器多し時去星移て小田原陣の時兵
燹に罹てむかしの十が一にも及ばず桑田碧海須叟にあらたまるの謂なるべし

当山名所四十九所

宮浴山　薬師ヶ嶽　地蔵山　精進川　不動石　御陣石　浦嶋の桜　相模津　伊豆津　菜池

冠ヶ嶽　臺ヶ嵩　孔出山　諸仏川　馬乗石　踏かけ石　鵆が杉　鐵梅津　枯津の池　阿字池

駒ヶ嶽　屏風嵩　挑灯山　琴川　馬牽石　目代木　湯杖木　駿河の津　血の池　蜂ヶ池

宝蔵嵩　二子山　仏供山　三途川　五条石　伽羅木　お杉　泊川津　銚子池　菖蒲の池

明神嶽　文庫山　蛇子川　吾妻川　福徳石　矢立杉　室津　花川津　精進池

東鑑曰

奉寄相模國早河本庄筥根權現御神領事

右件於御庄者為筥根別當沙汰早可被知行也前兵衛佐源頼朝為沙汰所寄進也全以不可有其妨仍為後日沙汰之注文書以申

治承四年十月十六日

同書曰

安貞二年十月筥根山神社擅佛閣燒亡當社垂跡満月上人草創以後五百餘歳未有回禄之例北條武蔵守泰時頻歎息潛有解謝之義被捧願書仍造營十二月二十八日遷宮

神社考曰

伊豆箱根者本社彦火火出見尊也又有駒形權現白和龍王右鵲王左鵲王及容人宮雅又有役行者吉備大臣弘法慈覺等遺跡

箱根温泉　七箇所にあり七湯巡りとて箱根權現坂にて御道に標石ありこれよりたの方へ

○生死池　標石より六町にあり。○頼朝御状書石　此石の上にて状を遊ばされしとなり由来はしらず

○蘚の池　石塔あり　此池の傍に法蔵比丘尼の○元西河原石地蔵　池の側に自然石乃地蔵を立たり

長さ丈余弘法大師の作なりといへり。○多田満仲石塔。○十二光佛石像　共に地蔵の次にあり

○曾我兄弟石塔。○虎御前石塔。○庚申塚　叢の中にあり土人云曾我又は虎が石塔ならず又一説に此所へ寄るといふ

△芦之湯　七湯の其一箇也權現坂より二里許　入湯は氣味淡く苦し又硫黄の氣強し浴れ湯は黄色なり功能は癩病黴瘡五痔一切の腫物に相應して早く治る浴屋の数は町許入湯の宿舎ありて奇麗なり

○小地獄　芦の湯より八町許にあり山腹に湯氣盛んに立て人は入るべからざる所なり近寄るに硫黄あり熱湯涌出して火氣強し　硫黄とある所あり温泉の源なり土人云此地獄の地氣より出る　小ある地獄より地氣強し山奥五里許に大地獄あり里説に是を地獄といふ

△氣賀湯　芦の湯よりまれまで壹里あり此間に岩湯上湯平の湯大龍等の四ヶ所あり何れも氣味鹹して明礬の香あり　中風瘡瘍に治る

△底倉湯　氣賀より半里中むかし地震にて名高き石風呂も絶て今絶えず　内湯二三ヶ所あり此所の民家箱根名物挽物細工を業とす

△宮下湯　底倉湯より二町むかふにて大略家續き内湯湯あり内湯とも温泉の水脈より通ひて家毎にありて入湯は湯へ

頸痛疝癪腰の痛に治る　打身に氣味淡くそのまゝ

△堂嶋湯　宮の下より五町許山下に内湯湯あり氣味鹹して積聚疝痛に治る

△塔之澤湯　堂ヶ嶋より壹里半あり七湯の中にて地境廣くして風景の勝地也山は勝箒山と号し川を早川といふ

いさよひ小記 あり同所の湯坂にそえて見わたせは青き木流るる早川の水 かの仲
橋は玉緒橋といふ水戸黄門光圀卿明人舜水と共にここに逍遥しありし
此号は与へて賦せる浴餘賦ありて廣く書院にかけ置く途中何れの
佳景之江府より諸侯時々ここに湯治し給ふえ湯は杉山弥五兵衛一之湯
は小川沢太衛門内湯は田村久兵衛萬屋甚八茗荷屋小兵衛等なり
凡て家数五十軒あり此温泉は気味
軽くして毒出し滑なり 諸病に治れ
△湯本湯 塔の沢よりここまで十町あり町の中に浴屋ありて四間に仕切る内
湯も二三ケ所あり穏なり 瘡毒癇癪の類によしこれより三枚橋へ
五町許あり畑と出て橋の東爪へ
ありこれより本道東海道へ

箱根山温泉記

相模国箱根温泉は白山妙理権現守せ給へる所なれは其神力はくは
へて諸病悉除の誓ひとほとこし此湯に入ものは人息災延命の楽保つれ
となまなれし此湯本は小田原の西十里はかりの所山谷へ水清く流
代も動き給はれ岩根あつまりて世も兼くねれむしろ其々麓に放光堂
ありて運慶法師か作れる地蔵井は安置し仏世界度衆生の誓言たて
く給ひ東に三峰橋とりて岸のかたへの小原宮富士岩様なれり其上

より時しらぬ雪の不二の高根はたえず見えくれなんとそけたかれしにて塔の鎮めにて妹
背山と其峯に涌出る湯谷なれは見景目と悦へし先心ゆるやかになる峯より
養性の所に叶へるしかの妙理権現は天地ひらけしはしめて女神あらはれ
給ふ中のいさなみの尊にておはします本地十一面観世音にて[illegible]の
都元正天皇の養老年中に泰澄大徳越路の白山に詣て修行し権現
示現ありて我は信心と身の命願を叶へりと除かん我らすちは
見よと宣ひて光かしらのお告に現し給ひしより十一面観世音菩薩
妙相端厳にて拝まれさせ給ひぬ泰澄威儀に袖を払て時にうち機應して今
かく現はれ見え給ふ此後来て見奉るとも[illegible]願は像法末法の衆生
小大悲は[illegible]袖くらくひまもうれ[illegible]申すわか[illegible]金冠は
勧請しけるを[illegible]霊験いちしるし 聖武帝の天平八年に疱
瘡の流行て上中下[illegible]ける泰澄に勅して
十一面観音の法を修せしめ[illegible]五畿の内は流に其まきつひとまねくる

といへり猶此所はくしのかくしと見ゆる関の東にハかの元を座主となりとし小
泰澄の神社浄定といふ者として有し即行者ハ此の國に浄定ハおはしら
たにりらはたえして枝をかへしむる小世の中れたりしさ中ねにて延宝十年に浄定此宗
御社ハ立て白山權現ハ勧請し十一面ハ拜て又十一面の尊像ハ彼りし小
此山の岩根忽ち裂て温泉涌出て長く諸人のめぐみとなりぬ九百四十餘年
ハ経て今の世も平かなる都　後柏原院の大永の頃りさて小京の氏綱の地
特賜正宗大隆禅師とあふえ其地に早雲寺ハ建立て温泉の出るをふ小
春の今に至るまで浴室ハ其ほとりに開きまりて金湯山と号し
中頃冬しく此湯寺地に属せし此寺おとろへて後久しく成ぬ就百年小
あまりの事と見えしはじめ此里民の家居もなかりしかど世の人埋木乃
人となり所の物語ハ此湯の事よりはじまりて家々繁く栄へて後遠
近人来りつどひ其利を得たりて家潤ひ里富て今の繁昌湯の名とて
小立そひて猶の地まで成ねとし天刑の病人のいたみ少しわるとれハ此湯

發して此とおりぬ人毎年湯の行なりみな詣でたれバ此出湯の霊なりまゐてもせのむら
さらぬ千道世男に湯井あまりとせしく此ふちて先達くくしみにより此里を
もとハひと山と湯坂といふ又津の國に有馬の出湯へ三輪の神垣神とひて醫王
善逝の勝地で此國の湯本の湯へ白山權現の垂跡観音應驗の霊區とかはく
いとあつくさの柏葉ハ見え少し豊なり名の國にきの立所しハてゝし
旧日の光の宮にかゝひたる事にそく称する西近彼驛山の温泉ハ秦皇の瘡ある
りえんとそ神女の出るよりしひ傳へたるしもかの國のこふにかるやうにもらそれのそる
日々ふちるへあまりへとかみかひて生青ハワざうしきの人陽徳の神とひゑせう
觀音ハ慈眼とりて衆生ハやあひてもひとの名ゆの海ハかハかし神徳ハ
お湯の流のとかいざうもも家にこれるぐくよれいもいへぐさくゑきせ
永禄の二せ霜月枝の三日浩陽の隠何これいまに應して新玉津嶋の
七松ゐ筆ハやりて祈る志侍る　浩陽ハ新玉津嶋社ハ五條三位俊成卿の宅地の
ちはく五条松原烏丸にて社ありて七れゐへ永禄
中の社司なりん元来勧延寶貞享の頃より小村季吟翁此社司を勤又
所書ゐ千ハ註解れ蟬吟芭蕉翁ゐ影筆の御なり

箱根の湯
極楽となる
軍書講訳

箱根七温泉の中に
肩
腰
湯槽に浴しても
楊弓軍書講談の

箱根名品挽物細工

街道湯本村にあり挽物諸品は細工して色々彩り塗て
店々に荘る又雛の茶道具人形の細工は至て精しくして繪がすの
箱に百品を入れて湯本伊豆屋の店諸品多し
又盆栽に添へし梅の枝を左右へ八九間も延ばする梅の名木あり

○権現坂より本道へは琳見坂 老ヶ平 右に大庫山 左に二子山見ゆるなり 湯子坂
猿滑坂 根穀坂 畑宿に此所の茶店あり 大腰坂 割石坂 南に三所山水呑巣
山三ツあり女ころばし坂に大石あり須雲川これより東の文城の跡あり右の方茶師
の龍 樫木坂 葛原坂 此所にて東の方に葛原山 北の方に丸山これあり 東に 遊持石
あり 観音坂 新道坂 地上坂これより湯本にいたる
東に新宮権現小に地蔵堂 蒼敬祠 芭蕉句碑あり

函關七律

關門百里倚龍嵸 十二東秦車轍通
天色幾餘黄霧外 人家半住白雲中
湖分銀漢星辰湛 峯並芙蓉氷雪同
一自終軍棄繻入 千今士氣此間雄

滕次公

按子なて茶名をばはしかりとてせまきに
政の厳刑ありといましめぬかしこれ
清代のまゝにありてか

限りなく手摺る音さや梅の花　　蕪村

あれ伊豆屋か盆栽の梅を見ての作

箱根の挽物店を見て

うれしさは玉子は箱根のみやげおや桔梗萩萩　　九狸

なつかしの道さかの河原も地獄遠きたなかる関門　　貞二

金湯山早雲寺

湯本村にあり禅宗崗家　金湯山の額朝鮮雪崋筆　方丈の額同筆

佛殿釋迦佛

開山正宗大隆禅師　本願伊勢新九郎長氏　永正十六年建立

北條五代墳

寺内にあり

宗祇法師墓

墳内にあり又傳に今小路通三の墓也

北条新九郎長氏法名早雲伊勢平氏の末裔にして桓武帝第五皇子葛原親王の末孫平清盛の後胤也相州小田原の城主として菩提所に建営は其に諸堂壮麗たり長氏故国を領し剃髪して早雲庵宗瑞と号し九十歳にて薨し此寺に葬る其次氏綱其次氏康其次氏政其次氏直まで五代の間関八州を領し皆此寺に墳墓を築く

覧箱根　貝葉作

諸聖悲羣彙　捜扶死生源　有身諸患本　七趣為樊園
受身何所縁　霊識是其根　識質相纏繞　萬苦不堪論
飄揚同野馬　騰躍似囚猿　不驚三有夢　何酬諸佛恩
縦聚河沙福　欺魄耦迷魂　雖説精真道　無殊酣酔言
琅函如丘陵　須知要領存

食息警遺忽　落思帰至尊

江陵　萬菴　著

早渓

湯本三枚橋より塔の沢の下流をいふ此所早川尻ともいふ頼朝に三百騎を引く早川党まで戦場にて悉く此所より湯本の方より敵山を越えて中に入込ばやしきと大事となれり宋嚮ひ石橋より入所に陣を取くなりし事盛衰記にみえたり又承久の乱に甲斐泰議中将範茂は北条朝時を将として深倉の中早川尻にて水中へ沈めらるゝ成のいぬ又元弘の乱にも泰議まの成輔朝臣此下にて斬らる事太平記中にみえたり

長興山浄泰寺

入生田にあり又入生田とも書る此辺より小田原石出る　禅宗黄檗派

佛殿阿弥陀佛

恵心僧都の作座像　武州許開山鉄牛和尚本願稲葉
僧之禅堂　食堂　昭堂　牌堂　鐘楼　宝殿　泰翁軒　廟等巌
重之門内より石階を登る事三百級之此地より遥に見る甘は之鴻鎌倉辞をして風色勝れたり

豊太閤御陣所

入生田の東風祭村の南石垣山之天正中小田原攻の時豊臣秀吉公の陣営之字を太閤せと云又城を居と云所に蒲生飛騨守の陣所あり

石橋山

小田原の入口より三里許西南にあり海面を遥に臨み風景いちじるし治承四年八月兵衛佐頼朝に大場三郎景親と合戦しのへは戦場なり

東鑑大意

治承四年八月廿三日武衛頼朝つゐに相山に陣し平家方大庭三郎景親三千余騎を引率して襲追駈る武衛やこれを免れて後の峯に退れ此

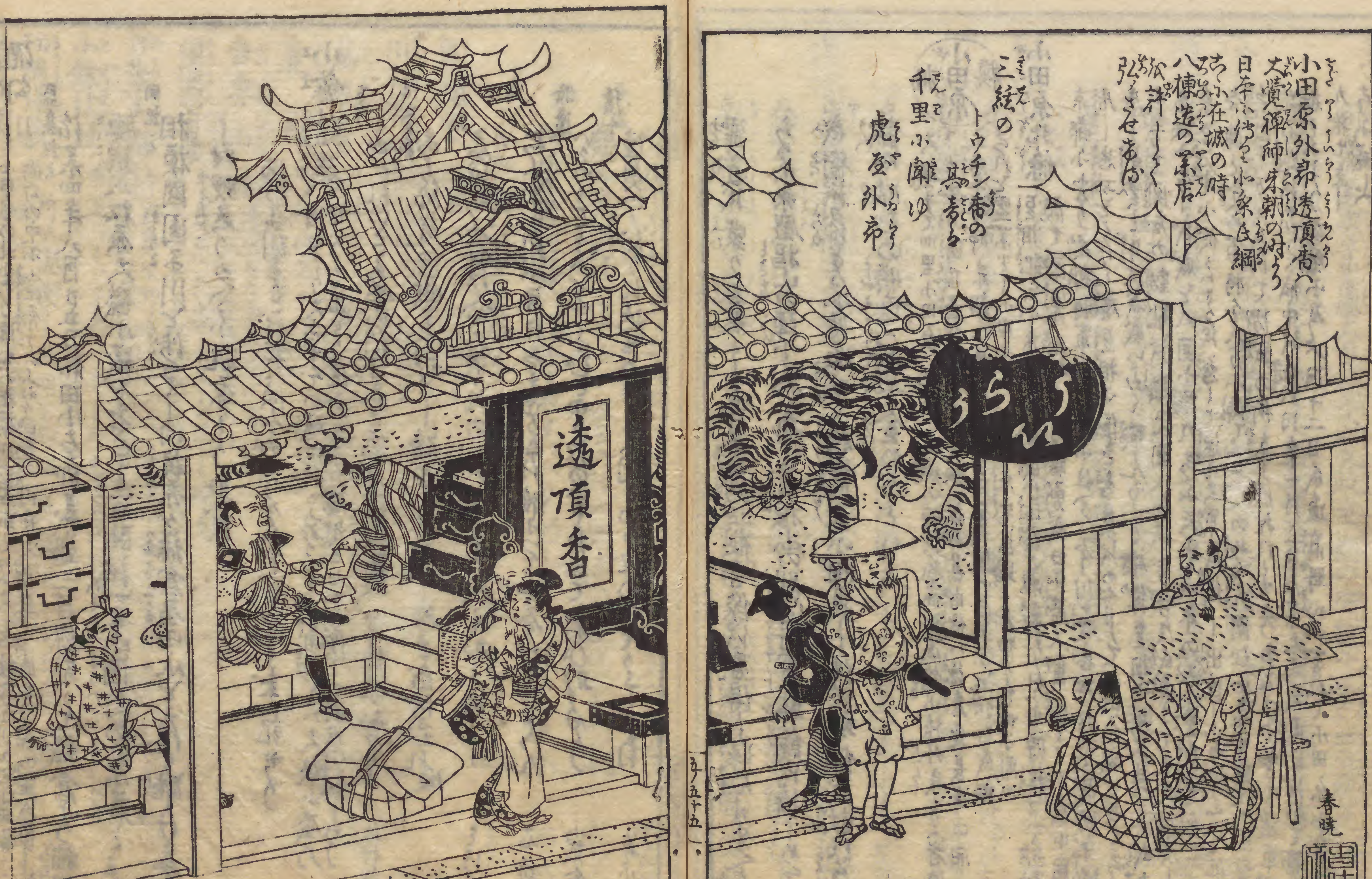
間に加る次景廉大見平次實政武衛の御後に從く景親を防ぐ北條時政ハ君を是をすゝめて數町の險阻をわたる處頼朝にハ節木の中に隠れ給く實平時政等其傍に侍る者ハ實平ぞ各無為乃參し給ふれぞ喜びありといゝども人数を率せしめ給ひ此所に隠れ居る事叶ひ難し御一身に於てハ縦旬月を歷るとも實平計略を加へ隠し奉るべしとて北条四郎ハ箱根湯坂を經く甲州に赴んとし北条三郎ハ土肥山より桑原に降り大庭景親ハ武衛の跡を逐ふて山谷を捜求する事急也時に梶原平三景時といふ者あつて慥に御在所を知るといへども有情の慮を存じ此山中に人跡なしとて景親が手を曳て傍の峯に登る此間に武衛御髻の觀音の像を出し巖窟に安し奉る實平其意を問奉る仰に云首を景親等に傳ふるの日此本尊を見バ源氏の大將軍の所為に似ずと人定て誹を貽さん件の尊像ハ我三歳のむかし乳母清水寺に參籠せしめ嬰児の將來を祈る事懇篤にて二七箇日を歷て靈夢を蒙り忽然として二寸の銀の正觀音像を感得し歸敬する所也と語らる北条殿相山の陣に参着し箱根山の別當行實是を餉を持しめて武衛を尋奉る小際屋咲て將の御前に相具し件の貽餉を献ず私饑に臨むの時直已に千金なりとぞ

相模 小田原

大儀まで四里小田原 北条氏綱の時京都西洞院錦小路外郎といふ者此藥を下り家方透頂香を製して氏綱へ献ず其由緒ハ源倉建長寺の開山大覺禪師未朝の時供奉し日本へ渡り家方を弘む氏綱是れを靈藥とし小田原に八棟の居宅を賜り名物として世に聞ゆ

小田原北條

豆相記に云北条新九郎長氏ハ伊勢盛の末裔たれども時移つて匹夫に落ちて漂泊し總れる智謀勇武世に蓋ハ鸞然として備中國より京都に上り足利將軍義政公に仕へく今川義忠を頼ミ高國寺城に居し忠功をとげて屢豆相に徴き勢業をめぐらして小田原城を抜てこゝに居し早雲と号し武威いよく盛んにして雄偉豆相に擅ハ其ハ二代氏康當時に居て武威を八関に耀かし天正十八年の春豊臣秀吉公小氏ヶ乙命に從ハざるを怒て速に大軍を催し出陣し石垣山に屏風を本陣と定め軍將を八方に備て雲霞のごとく丸く圍む小条も東八ヶ國の軍兵數十万を引て防戰の術を盡せども秀吉公の下知にて諸軍勢炮石炮を放つて城中を攻る同年七月五日左京大夫氏直城を出て罷と謝ゑに山り氏政に及び七月十二日氏直高野山に送れて小田原小条五代九拾七年にして滅ぶ


小田原外郎透頂香ハ
大覚禅師来朝の時より
日本ふ伝る北条氏綱
ちこふ在城の時
八棟造の茶店
御許しく
弘めさせあるか
三絃の
トウチン香の
其音を
千里ふ聞ゆ
虎屋外郎
春暁

酒匂川　小田原の北にあり酒匂は相模川の略訓といふ又一名鞠子川ともいふ小田原と酒匂の中に山王原といふあり星月の御井上宮あり三浦荒次郎の霊なりといふ

盛衰記云　治承四年八月廿五日和田小太郎義盛三百余騎にて鎌倉より稲村腰越八松原大礒小礒をうち過て二日路を一日に酒匂の宿に着と云云

同記云　相模国国府川と渉つゝ一時梶原が孫倉辺に水と云所に駆け奉り

一時見えつるに梶原とかあらん

ゆるぎ川あたりは浪をあらくやと申せし事を記せり

小餘綾礒　酒匂より大礒までの礒辺をいふなり方角抄に大礒小礒の辺なりと記せり鎌倉志に腰越と七里が浜との間に小動といふあり

古今　玉たれのこかめやいつらこよろきの礒の波分沖に出にけり　敏行朝臣

旧大歌所　こよろきの礒立ならし礒菜摘めざしぬらすな沖におれ波

後撰　君をのみ思ひこゆるぎの礒乃玉もや人もかりなし　[illegible]

同　はや来ても月日をまちかね礒にいそや今ならなん　右近

拾遺　いかにしてかくとつげまむこゆるぎの礒にもかひはありけり　小弐命婦

続千　陸奥は世をうき島もありといふ関こゆるぎのいそがざらなむ　小野小町

新拾遺　こよろぎに又うちよする浪のいそぎて法の舟とく出なり　祐子内親王

夫木　鶴のすむ松も老せぬこよろぎの礒の蟹さへ千世とぞ祈れ　能宣

同　こよろぎの礒乃松風音たれて夕波千鳥声さわぐなり　土御門内大臣

きのふ立ちけふ来て見ればこよろぎの礒乃浪いそいでいそげ東路の道　小寺氏康

曽我里　酒匂川の東に八幡より廿町許入て曽我中村といふ曽我兄弟の住し所なり山中にありて

川勾神社　礒辺村にあり延喜式に餘綾郡一座とあり今二宮明神と称す例祭五月五日

藤巻寺　同村にあり梅澤山東光寺と号す真言宗之堂あり本尊は二本木の宗旨あり寺の諸本尊に安置しあり

鹿松　同村松原にあり由緒詳ならず

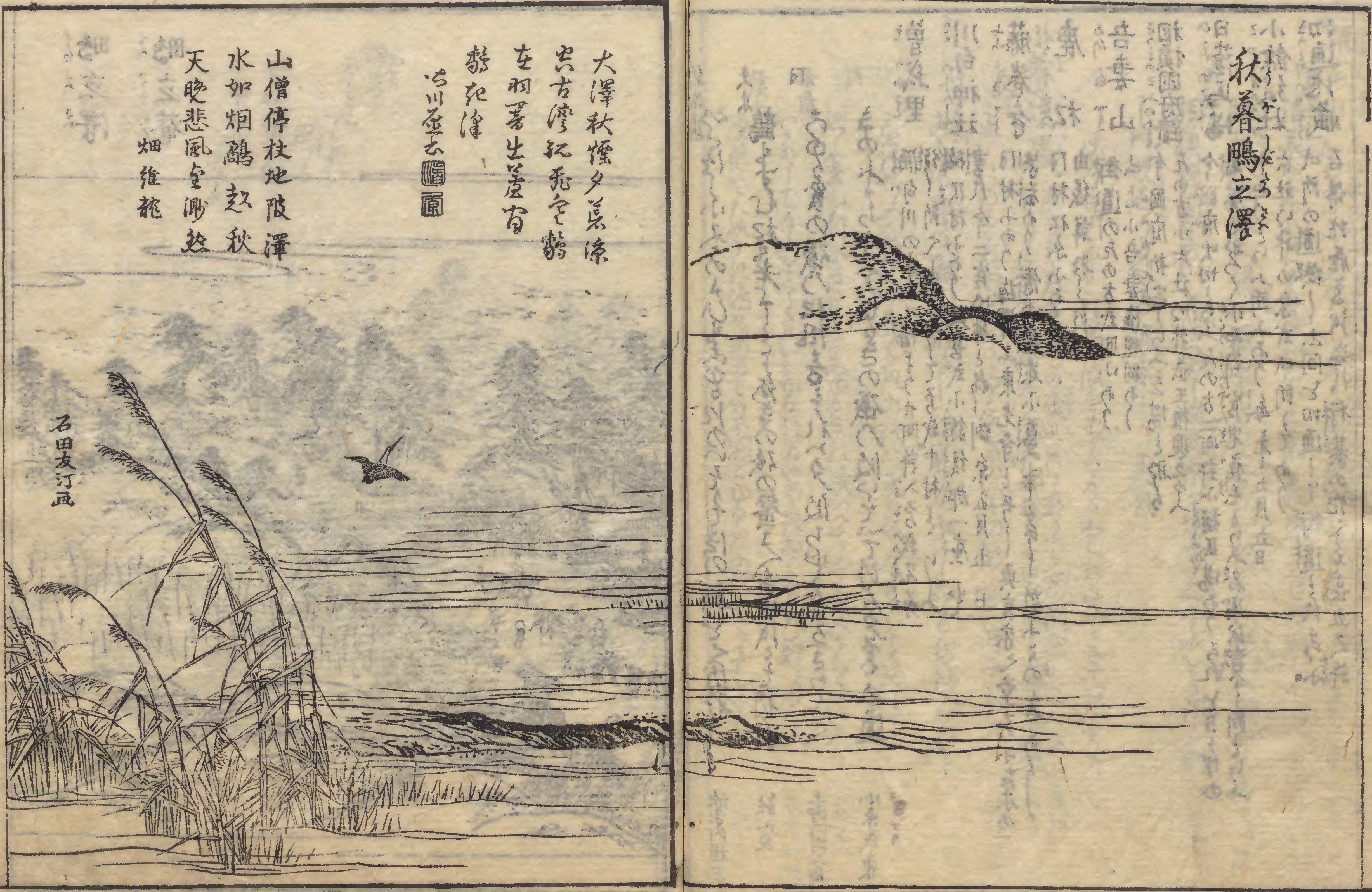
吾妻山　山上に吾妻権現祠あり御道の左の方武町にあり

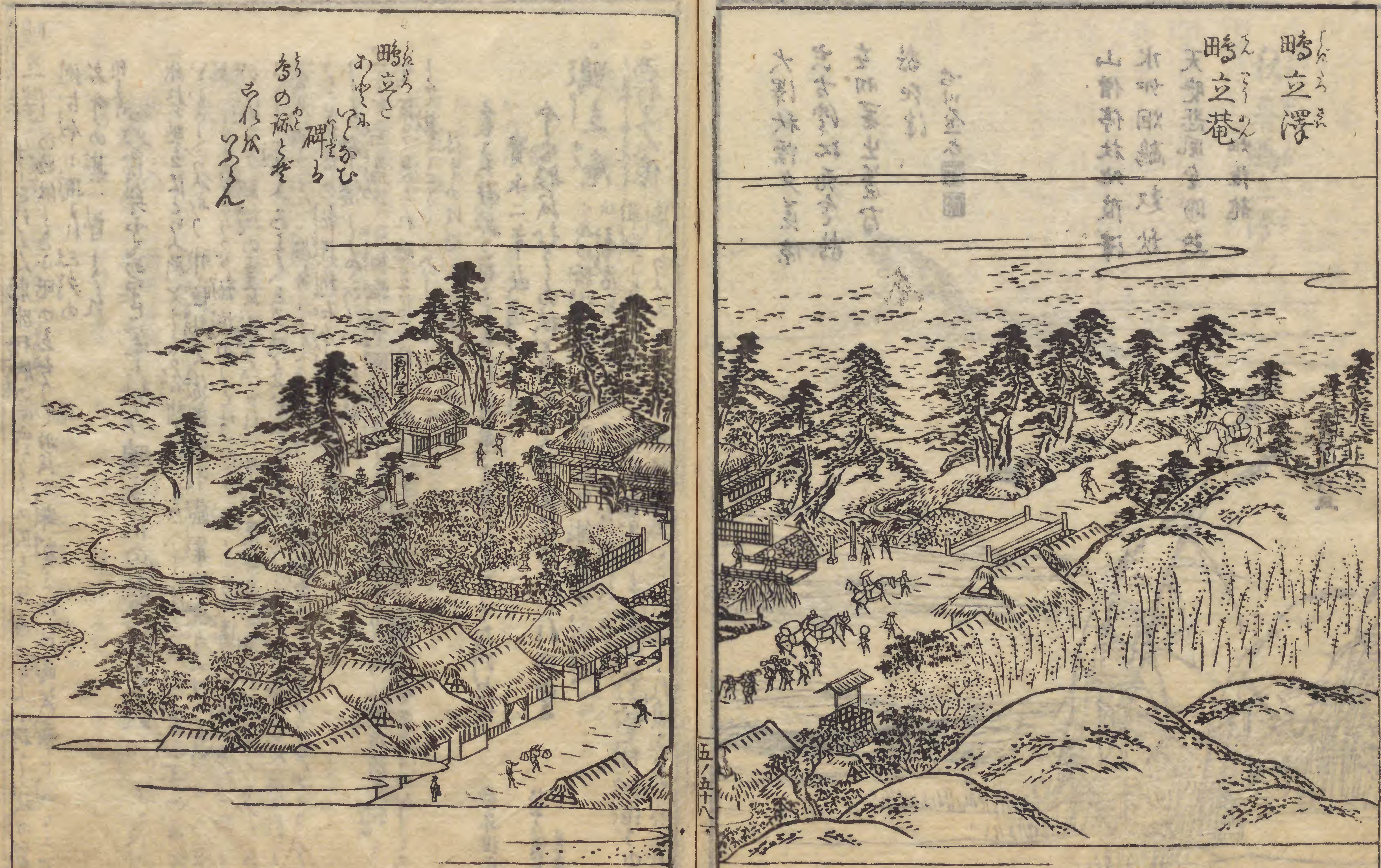
相模国府蹟　今国府新宿といふ之を場とおもふ左の方に六社明神蔵王権現あり

日蔭馬場　今国府吹切といふ左の方二町許に桜馬場あり是を日蔭の馬場といふ国府判官思鹿毛といふ名馬を試し所といふ

小餘綾社　中といふ所にあり毎年五月五日六社明神の祭式此所にてあり

切通地蔵　此所の道狭し山間を切通して御道とす石仏地蔵を安す行基の作とぞ長五尺許


秋暮鴫立澤
大澤秋煙夕景涼
亘古灣孤飛去鷸
在羽翳出蘆宿
影沙津
古川孟云
山僧停杖地限澤
水如烟鷸起秋
天晩悲風全渺愁
畑維龍
石田友汀画


鴫立澤
鴫立庵
鴫立て
おもひいとかひ
碑を
鳥の跡とぞ
古ほ松いろん

鴫立澤　むかしありける人東路行脚の時此あたりの沢を通りけるに折ふし秋の暮の物淋しき小鴫の立さりて哀にも寂寞たる風情を感じ詠じけるとかや新古今に撰れし三夕の名所の其一首とかん

新古今　心なき身にもあはれはしられけり鴫立沢の秋の夕ぐれ　西行法師

抑此鴫立沢といふ所とよみたる名所なりしを後人は大磯小礒の海浜と思ひくらべあやまり誹諧に撰て俊成御千載集に撰み入給ひし西行上人吾妻の方にありしが勅撰の事を聞て上洛し道にて登蓮法師に入逢ひて勅撰の事を語り給ひ夕ぐれの哥やいかにと問給へは早撰に入ぬと答へ給ふ上人是を聞給ひて鴫立沢の哥や入りしかと問ひ給へは入らずと答へけれは又東路へ取てかへりけるとかや其後の勅撰新古今集に撰入れられし

〇一とせ飛鳥井亞相雅章卿勅使として吾妻に下りの時此所に到り鴫沢とよんで鴫立沢の跡をとふらんとて所の者に案内させてさてのかしこのとて其かたこそもぞおもしろけれ一首
　　弥生の比鴫立沢にまかりて
哀さは秋ならねどもしられけり鴫立沢のむかしたづねて　飛鳥井雅章

寶永二年秋通りける時
今もなほむかしの秋と思ふぞよ鴫立沢の夕ぐれの空　松平右近將監　邑乗

〇鴫立庵　小礒の踏儀にあり寶永年中誹諧師三千風此草庵を結んで鴫立沢の古蹟をとどむ

〇西行上人像　草堂に安置す相傳ふ上人六十四才の肖像にて高雄の文覚坊作りの像とかや又西上人の放筆色紙あり什物とす真筆なりとぞ

〇虎御前像　草堂に安置す十五歳の像大磯の虎とかより後人作りてもしくはあらし側に東鑑の文石に彫して立
〇鴫立碑　此地開基の時三千風これを建る碑文にもしるし三千風が芳志を感じて左に載る

銘曰

心なき身にも哀はしられけり鴫立沢の秋の夕
音とおもはれんとはのみん かからおもて
此ゐの身はおもふ名此 いみおく
見ぬせの旅乃 門いての 佐衣の山
うけしき 命おもふを 身のゆかし
ある箱根や 風にかる 其のの鴫乃
沢水乃 あるよう 名ところは
あらふや時え 新古今 おしも春の
あまれさ いろある雅章 澄欲ゆく
我もあ 志れもう 嵐のまに
高き子と 月よりかれ さらいつて
それ名高雄の この沢乃 和歌之神や
きんくの 宗雪居士の そう所
席に堂 猶五郎之 田島集に
吾方は 詩哥連俳 五百年後
団しの 論におる 友達人
満頭せし 我団の 施入なおて
たのしや 心なき身の あへり 道まへいき 立しい室

元禄十三暦辰二月望日　東往居士三千風誌之

平塚まで廿七町は四より盆山石ある茶店に出してされと貴人家にあらし

相模 大礒

虎子石 駅中延台寺にあり當寺に此石の縁起あれども詳ならず

十郎慷慨愛於虎 血氣武人犀甲軀
妾婦當時誓星否 隕成此石似望夫　羅山子

三社権現 高麗寺村にあり宮寺は鶏足山高麗寺といふ
同基は文観僧正之例祭六月十八日此所の生土神とす

祭神忍穂耳尊 社傳云むかし神功皇后三韓退治の御時高麗より神威を耀しましく平定有て神霊三韓に止りて居給
仁徳帝の御宇に帰朝ましくて此人神儀を三国と係せの神なれば三社権現と崇めまつるよし又伊豆御山へ神幸ありしなる時大磯の浪間に赤々光ありて伊豆山の松葉仙人これを見て大磯に来り光の本はさぐりしに円形三尺あまりの面の神像は得より其後霊瑞なくあれば伊豆御山にうつしまつる松葉仙人は日金嶽に社あり是を高麗寺とも号し鶴ヶ岡の名ありてなりたる縁にあり鎌倉之次下にいふべし

花水橋 高麗寺村にあり此辺より富士山よく見ゆる風景よし

驛馬進蹄行一路 野牛浮鼻入前橋
遨遊眼豁海山景 畫人過花水橋
　　　　　　　　　　　崎闇齋

相模 平塚

藤沢まで三里半

八幡宮 八幡村にあり別当は鶴岡等覚院といふ
例祭五月五日社内より大山不動尊への道あり

馬入川 馬入村にありしは相模川といふ水源は甲州猿橋より流る此辺の大河なり
東鑑に文治四年正月三浦介義澄は相模川に堪し来るくらる
又俗傳に建久九年十二月稲毛三郎重成亡妻の追善のため相模川に橋供養あり此時重成が妻は北条時政が娘にして頼朝公の御台政子の妹なりければ右大将家御結縁の為に渡らせ給ひ帰路に至りて八的が原にして所にて義経行家らが怨霊は現ずる又稲村崎にて安徳天皇の御霊現れ給ふを見て忽ち身心悩乱し倒れて落馬しければ供奉の人々驚き扶て後ろ圍み助け参らせて御帰館ある遂に御悩重らせ給ひ医療術を尽くされども更に其効なし其年も既に暮て明る正治元年正月十三日終に薨逝ましましけり御歳五十三とぞ聞へし征夷大将軍正二位前大納言兼右大将に任官してより凡そ世は治まり権を執り給ふ二十年なり御歿後所謂源家の政事は此悲歎に耐えかくて

一説には此橋供養の砌水上に悪霊出て黒雲舞下り雷電霹靂して其時頼朝公の乗馬駿馬にて驚き馬は水中に飛入て忽ち死しければ此所を馬入川といへり俗説なり其の實録は見ざれば臨にしるされ本能ならず

太平記云

相模入道高時の嫡子相模太郎邦時は五大院右衛門宗繁が妹の腹に出来たる子なれば甥く主と親しくして深く憑まれたるが野心を挟んで隠しおき源氏の侍に討せて勲功を得んと思ひ船田入道に告て相模太郎の落ゆきたる道を遮ぎてぞ待ちたる相模太郎は道に相待故の向ひも去ば正慶二年五月廿八日の暁に隠しける寓を出て相模川を渡らんとけるし守は待く岸の上に立たるは五大院右衛門宗繁に立

てあれにあせさらん件の人々をし数されハ舩田ヶ郎等三騎馬より飛てよりて透間なく生捕なる侭の事にて張輿なぞもなければ馬に乗せ舟の縄にてまさかにあれば誡め中間武人に馬の口引かせて白昼に鎌倉へ入れなる是を聞人毎に袖を絞らぬハなかりける是は人未幼稚の身なれハ何程の事か有へきれども朝敵の長子なれバ閣べきに非ずとて則翌日の暁暦に首を刎る昔程嬰が義を成して幼稚の主の命に換豫譲が貌を変ど舊君の恩を報せし其ためにこそ何れも五大院が心の程希有也不道也と見る人毎に爪弾をして悪しみける義貫實りとそひかれも誅すべしと内々其義定りまれば宗繁傳聞てあちかしこに隠れ居るが積悪の罪身を責るゆゑ三界廣しといへども一身を措に處なく故舊なりといへども一飯を與る人無して遂に乞食のごとくに成果て道路の遅みにて飢死したるとぞ聞へし

十間坂

馬入の東壱里許にあり此所左に富士大山箱根右に江の嶋鎌倉六浦金沢など見ゆるなり十景坂ともいふ建武のころ北条相模次郎時行三万騎の勢にて鎌倉を發向し此所にて十七ヶ度戦ひ三百騎に討なされ鎌倉の大御堂にて討死したる事あれもを平記に見へたり

大山寺
一鳥居

大山寺

雨降山大山寺

相州大住郡大山の巓にあり真言宗修験道別当八大坊其外
坊舎十八ヶ院閉伸百五十餘字又蓑毛村に十五字修験之

前不動堂 上方京師より参詣ハ吉田小田原より左へ曲つてそれより蓑毛を
六里半之江戸より道ちかハ藤沢の西四ッ谷より右へ曲りて山麓
子安村まで五里それより一ノ鳥居あり是不動堂まで廿八町坂路の両側民家軒
端につゞきて御師の家旅舎茶店あり是を名物の挽物店多し坂路なる
石階にして凡数一万五千餘段ありそれ不動より本堂まで
十八町男坂女坂の二筋の坂路あり岩石多くして甚だ難し

奥不動堂 本堂と称す本尊大聖不動明王ハ
僧正良辨の作座像長五尺南面

行者堂 本堂の西にあり役の行者を安置す

鎮守 本堂の後にあり天照大神 山王 熊野 大黒天 春日 石尊 不動尊を祭れり

白山祠 本堂より七町許上方にあり

神輿舎 行者堂の傍にあり

鐘楼 瀧の路にあり鋳られし銘の末に寛永十八年辛巳十一月廿日
大擅那従一位左大臣源朝臣家光公と鐫れ

山門 本堂の下にあり **二王門** 下にあり **経蔵** 二王門の傍にあり

二重瀧 本堂より二町許下にあり 傍に龍權現祠あり

良辨瀧 坂路のうら開山町にあり **新瀧** 坂路福永町にあり傍に愛宕権現祠あり

大飛泉 霞河原にあり 一の鳥居より上方

○**石尊大權現社** 本堂奥の院也是より嶮路十八町にあり女人結界之地たり
常に諸人の参詣を禁じ毎歳六月廿七日より七月十七日

まで参詣を許されて江戸及び近國近郷の貴賤群をなして登山夥し
道中筋大に賑ふ本堂の傍なる門を閉て登山す

祭神大山祇命 神躰ハ巌石なりと傳ふ昔日本武尊東夷征伐の御時此
嶺上に騰り給ひて遥に拜し給ふ石ありと云 親鸞
聖人相州に七ヶ年経回の時も此山にのぼりて此石面に歸命盡十方
无㝵光如来の十字を濡筆しのこせし教顯寺第八代蓮如上人
のちにこれを摸して其旨趣を
書のこし遺文當山に傳来すといふ

末社 徳一権現祠 風雨両祠 大天狗 小天狗祠 石尊宮の傍にあり

寺説云
当山大山寺の開基ハ良辨僧正也 此僧正の傳ハ釈書に見へたり 俗姓を近江國志賀郡の人とあり當山の説と
と異なり大和名所図会にも 此人の俗姓ハ相模國鎌倉漆屋太郎時忠の子
也と傳記大略出せり
人時忠ハ聖武帝の御宇神亀年中関八州總追捕使として東夷を
治む其祖先ハ大織冠鎌子大臣の玄孫にして鎌倉に在住し家富栄て
一門軒をならべて盛んなりしかれども齢四十に及ぶといへども家を継べき子なしある時
時忠妻に語つて云我家倍繁栄なりといへどもいまだ家督となるべき一子
も持ず是者一の憂なり且ハ女の身として子なきをば石女とて罪業深し
諸菩薩の功德何も比類なしと言ども特に観世音勝れ給へりとて共に常に

あれば念じ一子を備へんとて其より普門品を晝夜讀誦する事年あり
或夜の夢に齢八旬に丈なる老僧香染の袈裟に水晶の珠數をつまぐり
右の手に鳩の杖左の手には一巻の経を持し枕上に立せ給ひ此経ハ法華経第
二十五普門品なれば誰しらぬ普陀落山の教主なる此経を夫婦の者に授くと
て授させ給ふと夢に見て夫婦は霊夢を掌にて感涙して歓びつゝ程なく妊身と
成て月を累て一男子を備く夫婦の寵愛限なし出誕の後二月ばかりに
赤子を乳母に懐せ母ハ園に出て桑を摘れける其時雲中より金色の鷲
然として翔来りて赤子を抓んて虚空に飛ければ嗚呼哉といへど早雲に入て見へず
夫婦の歎ハ天に仰ぎ地に倒れ悲歎慈傷腸を断ばかりなる斎に一子を喪ける
より家屋財寶益なしとて其侭に捨て共に何国ともなく我子に再ひ
逢んとて深山の幾々なるにかけ入巌を扼じ木實を根とし又荒猿の凛々たる
をかむりに臥て狼の聲に夜を明し年月を累て我子ハ夢にも見せねかしと思ふての斎に
我子は風狂のごとくあかしくに呻吟ありけ陸奥の大隈川に至りてかくなん

みちのくのおふくま川と聞けれども我逢もなし流す泪の

夫れより東山道にかゝり信濃國より住馴し相州由井里へぞ帰りけるに
住し家も今ハ其形もなく壁落軒端崩れ門も朽て扉もなしされば二人ハ涙
もろともに又故郷を立出て都の方へと志し行ぞし海と浅る紀伊國の果まで
まよひ入て體ハ顦顇と衰て見る人にかけもなく流落の姿と成けるを
森の鶴叢の雉子の聲も猿の聲の断腸の思ひ耐かね共に血涙をながし斯て一日
の根も之しく半日の齡のうれ未幾程もなきかのうちに今日の餘命を斯くもつらみを言早
三十の年を經て老驥の千里を思ひとも病ハ飢鷹の一啄を
まけるが其頃南都に義渕僧正とて碩学宏徳の名僧ありけるが或夜の夢
に當来導師弥勒菩薩来臨の体と夢見玉ひ其早旦に春日野に到り
大明神に詣し其ゆうさ大なる楠の枝の間に赤子の泣聲聞ゆ怪しく立より
見玉へハ金色の鷲嬰児を懐て巣中にあり斯て僧正持尊の不動呪を
祈りたまへハ一疋の猿来りて其嬰児を懐て僧正にさゝぐ即家に入り撫育し

者と聴ゆる名とは金鷲童子と名を號る斯て年月を暦ほどに十九歳に
そなりあひたる聰明清徹の神童にして他に又なき者なりし然るに師の僧正は
年齢八十にして遷化し給ひしかバ金鷲寺童子に譲り果し其時追福の為に年
作しらし執金剛神の像を作りぬまたの御足に縄をかけて引動しなどして禮拜
毎に唱へ三聖朝安穏天下泰平興隆佛法利益衆生としぞ祈りける信力
通しけん忽御足より五色の光明を放て宮中を照しける　聖武天皇これを
奇とし給ひて勅使を遣しその光の元を見せしめ給ひしかバ金鷲行者の許へぞ
到入る勅使則て曰いかなるや光明王宮を照すと金鷲答て佛法興隆の志
願あり勅使よしを奏達ありしかバ帝大に悦び金鷲行者をめされ勝に佛法
恭信の志ありとて叡しく其師を求め行者を是より我戒師となさんと宣
旨ありしかバ金鷲謹て薙髪して良辨と申たる其より　帝の御帰依深
かりしかバ遂に春日野に東大寺を建られこれを大佛殿と称しける即良辨
別當職を掌らしめ是華厳宗の濫觴なり是往に時忠夫婦ハ西海を遊ありき

出て山城國淀の大渡に着て歩し宿を頼て便船を乞てそれより船にとおしこ
河國志らぬ里の人にも乗合たれど思はぬ心に云る中に當時奈良の都
聖武帝の御戒師東大寺の別當僧正良辨と申ハ今幼き時鷲の巣
より卸したる人とぞ承る今ハ帝の御依依重く世の聞えも倒きなく侍る
とぞ語りたる時忠夫婦これを聞よりも胸騒ぎ急ぎ船より下りて奈良の
都に到る其地の寺社を巡礼し偏に我子に逢せ給へと祈念なしけるに二人ハ
ある日も其辺り詣こられしが其身疲れて東大寺の南大門の傍に二本の杉と
云て東薦を纏て悩煩ひたる其頃僧正良辨参内の為に老夫婦の方へ
光出て良辨の車を照しける僧正怪み問せ給へバ我ハ相模國の者にて
鷲に取れ餘所の子供をのせし三十餘年其行方を尋ねしかバ之を申
其誕生の年月いかにと夫婦答て其嬰兒の守袋にも記せるごとく慶雲二年
巳四月十五日と僧正これを聞て扨ハ我父母なりと且ハ歓び且ハ歎き
共に御車に乗て御館舎へ伴ひ其後貴賤これを傳へ聞て袖を絞らぬ

ゐなりけるを帝きこしめされ感涙を催し給ひ則詔有て本領安堵の官
符を賜ハりけれバ相州由井里にむかしに変らぬ館を造りて遠近の親族
聚りてむかしの春に逢あらしといへど賑しきを見るに多く良弁僧正も
故郷なれバ相州に赴き給ひ由井より西の方に当て高山あり其山
嶺より霊光赫々たり則僧正也山し土民を聚て大木を伐し山石
を穿て高峯に至り光の元にいたりみるに金色の石像の不動尊出現れ
僧正これを祈念し石尊と仰ぎ社を建て安置し又欅木を以て一躰の
尊容を作り今の本堂奥の不動明王これなり此山峯高くして濃泉あり
一の流と下しまた祈りしバ巌頭より一流の飛泉滔々として落るなり
今の二重の瀧これなり即青龍権現と祀て祠を傍に建給ふ当山開闢の霊
応ハ帝に奏し給へバ叡感斜ならず総房相三ヶ国の中にて寺を
若干寄附し給ひて其倫旨ハ其より伽藍壮麗にして四十九院の坊
舎に香煙の白ひ芬々たり益未来の祈祷として僧正明王の宝前に三七
日六波羅密を修し給ふを満願の日明王一偈を示して曰

当来導師慈氏尊　法華示生名良辨
我山建立作佛事　末法衆生施安樂
此地清浄為結界　迷多衆生不来住
東南西張北八町　我形像作為本尊
是山五[illegible]表形像　五大明王当守護
一度参詣得壽福　家内安穏無諸病

当山金堂の乾の谷に大なる池あり此池にて良辨一七日加持し給へバ池中より
大蛇現じてこれハ此山の守護者之年久しく荒神と成て五濁の塵に交
り法性の暁を見ざる也へ蛇身となる今僧正の法施により都率内院に生
る此後当山に跡を垂て永守護神と成て法と魔障をなす者を平げ通じと
云終て見へず以上当山寺記の大意なり抑此山を相州第一の高嶺にして常に雨氣
絶ず故に雨降と山號とせり山麓より頂嶺まで巉々として平なる嵓敢ど
双べく帳々として左右に民家相連り其中に当山の御師の家多く諸国に
檀那を持て家々神札を配るいふしへを祈験者のもの聞也山奥の石尊
神を阪径崔嵬として雲に連り霞に封れ毎歳六月廿七日より七月十七日

低限て路は開れば江府の詣人稲麻のぬく近國近郷の登山竹葦小似たり
旅舎も許せしまぞさき大谷山野の茶店は其地の産物をおいて富小田原の
方よりの詣人も飯住の観音小参詣して坂東五番の札所と拝れ養毛より
此りて大日堂養毛不動は拝れ山明王なり　應神帝の御宇初て漢土
より渡らせ給ふ大小より日本宣初の霊尊と崇む原大山の名也之神并
大山祇命は名れく山の名小依るとや京師の愛宕山和州の金峯山小
比して絶峯也乾坤と雖も天地の外小出るぬく真小捨芥抄小見
へたる七高山の外小して八極は觀靈嶽なる下
一條屋時忠は近州志賀といひ又相州由井里といふ本尹一勘あり時忠ハ藤原氏
みて後海公の後裔之因起近江小鎮他おく下　又相州へ任國みして往居せり
故小近州といひ相州と
いふも此旨徴なり

東海道名所圖會巻之五　畢

五之六七巻一

国立公文書館
National Archives of Japan